

●其他の諸族。その他近江に淺井氏があつた、主家京極氏を覆して自立したものの、紀伊に北畠氏があつた、忠臣親房の子顯能が、同國々司に任ぜられてより、連綿ここに及んだものである。また美濃には齋藤氏、大和には筒井氏等があつて、鎬を削つて互に相争ふた。

●近畿概観。抑々近畿は政權の所在地、覇を中原に唱へんとする諸將の垂涎おく能はざる地、従つて全國的大旋風の大中心である。されば土地狭くして人徒に多く、即ち小國限りなく對立し、互に牽制し、掣肘し、以て何れも覇を成す能はず、永久彼等は依たる小國のままで終つた。然り、羈者は反つて僻遠の地に生れるものだ。龍虎をいだし深山大澤に譬ふべき僻遠の地だ。或はよく近隣の地に表はれるものだ。居りて養ひ動いて攻むるに都合よき近隣の地だ。かくて中心地の人その人は、屢々決勝戦まで残り得ないのである。

●中國。●東山陽の宇喜多氏。東山陽には備前を本據として宇喜多氏があつた。もと主家浦上氏を倒し之に代つたものであるが、後次第に勢力を得、美作・備中を併呑し、また赤松氏の舊領播磨の地をも領有するに至つた。

●東山陰の尼子氏。東山陰はもと山名氏の所領であつたが、やがてその衰弱に乗じ、出雲の守護

尼子氏、起つて四近を攻略し、遂に因幡・伯耆・隱岐等を併呑した。

●大内義興。大内氏は、應永の亂後勢力一時少からず衰へたが、やがて再び恢復し、義興の頃にいたつては、その領土は山陽(安藝・周防・長門)・山陰(石見)・九州(筑前・豊前)に跨り、その財力は、朝鮮・明等との交通貿易によりて、富強天下に最たるものがあつた。されば當時、山口町の繁榮は實に京都を凌ぎ、従つて京都を落ちた公卿等の、義興に來り頼る者が少くなかつた。

●毛利元就。【大内氏の滅亡】然るに大内氏にては、義興の子義隆つぐに及びて、富強をたのみ、功に誇り(後奈良天皇御位位の御費用を献じ、功によりて)漸く武を顧みず、驕奢文弱に流れ、加ふるに嬖臣を寵して、政治頗る紊亂した。されば老臣陶晴賢は、毛利元就等と共に、再三その不心得を諫言した。然るに義隆は之を聽かず。のみならず反つて晴賢を惡んだから、晴賢遂に意を決し、斷然職を退き、やがて九州の大友氏と結んで叛旗を擧げ、武備なき義隆を大舉して襲ふた。かくて義隆は自殺した。さしも榮華を誇つた館舍・殿邸・市巷皆灰燼に歸した。

●毛利氏の勃興。ここに於て元就は、後奈良天皇の弘治元年(二二二五年)晴賢を嚴島に欺き誘ひ、風雨に乗じて急遽陣を襲ひ、遂に之を攻め殺した。等しく權力主義の醜き争鬭とはいへ、元就の

舉兵は、その名目俯仰天地に愧ぢざる義舉だ、義兵だ。されば之より元就の威望頓に揚り、周防・長門を中心にして、忽ちにして大内氏の舊勢力を繼承し、また兵を出雲に出して尼子氏をも攻め滅ぼしたから、遂にはその領土、中國・九州十八國に亘る大勢力となつたのである。

四國 阿・讃の細川氏 細川氏は足利氏の同族である。阿波・讃岐・淡路を併領し、その勢一時頗る振ふたが、のち家臣三好氏政をとるに及び、内亂相つき家運衰頽した。

伊豫の河野氏 饒速日命の後裔智氏より出で、代々伊豫を領してゐた。文永・弘安の役の勇將河野通有は、かつて此の家に生れたものである。

長曾我部元親 はじめ土佐には一條氏があつたが、一條氏衰ふるに及びて、その家臣長曾我部元親代り起り、まづ土佐を固め、やがて阿波・讃岐を侵し、伊豫をも掠めて、終には四國全土を領有するに至つた。

九州 大友義鎮 大友氏は藤原秀卿の裔、代々豊前・豊後を領し(屢々鎮西奉行に)て義鑑に及んだ。然るにその子義鎮(宗麟)權略あり、頻に領土を四隣に擴げ、また南蠻・ポルトガル・スペイン等と貿易して、富強天下を壓するの概を示した。

肥前の龍造寺氏・鍋島氏 肥前地方はもと少貳氏の領土であつた。然るに少貳氏衰へて其臣龍造寺氏起り、後また龍造寺氏衰へてその臣鍋島氏之に代つた。

島津義久 島津氏は源頼朝の孫忠義より出づ。代々島津の庄の地頭であつたが、義久の頃勢大いに振ひ、薩摩・大隅・日向を併領し、また屢々兵を北部九州(筑前・筑後・肥前・肥後・豊前)に向け、かくて大友氏と共に九州の兩大勢力であつた。

【練習問題】 (一) 戦國群雄割據の概況(海兵)。 (二) 北條早雲(女高師)。 (三) 伊達政宗(海欄)。 (四) 川中島の戦(陸士)。 (五) 桶狭間の戦(陸幼)。 (六) 一向一揆(陸幼)。 (七) 大内義興(高商)。 (八) 陶晴賢(陸幼)。

第十九章 外國との交通

支那との交通 文永・弘安兩役後の交通 文永・弘安の役後、元との交通は一時杜絶した。けれども僧侶及び商人(殊に西國の商人)等は、私的に交通して、或は法を求め又は貿易の利を占めた。

尊氏時代の交通 足利尊氏は、僧疎石及び弟直義とはかり、朝廷の許を請ふて、毎年二艘の商

船を元に遣はすこととした。之を天龍寺船といふ。蓋し貿易の利によりて、天龍寺建立の費を得

支那との交通		朝鮮との交通		倭寇		外國との交通	
●文永・弘安兩役後の交通(私交)	●尊氏時代の交通(疎石の議によりて天龍寺船・年二回)	●義満時代の交通(明と交通した理由)、「勘合符」大内義興嘗掌す	●義持の斷交	●其後の將軍の交通(義教)彼國の正朔を奉す、「義政」同、「その後」亂世により國交は杜絶・私交あり	●倭寇(同胞日本人の海賊團)	●倭寇横行の理由	●倭寇の侵略(鎌倉以來あつた・戰國時代は全盛・八幡大菩薩の旗・支那朝鮮人バハン船を恐る)
●高麗の滅亡	●朝鮮建國と我との國交	●歐羅巴人の東方遠征	●ポルトガル人の來航と鐵砲の傳來(天文十二年・種子ヶ島・武器戰法築城法等の大變革)	●イスマニヤ人の來航(天文十八年・ザヴィエル・天主教を傳ふ)	●高麗の滅亡	●朝鮮建國と我との國交	●歐羅巴人の來航と鐵砲の傳來(天文十二年・種子ヶ島・武器戰法築城法等の大變革)
●其後の將軍の交通(義教)彼國の正朔を奉す、「義政」同、「その後」亂世により國交は杜絶・私交あり	●倭寇(同胞日本人の海賊團)	●倭寇横行の理由	●倭寇の侵略(鎌倉以來あつた・戰國時代は全盛・八幡大菩薩の旗・支那朝鮮人バハン船を恐る)	●イスマニヤ人の來航(天文十八年・ザヴィエル・天主教を傳ふ)	●高麗の滅亡	●朝鮮建國と我との國交	●歐羅巴人の來航と鐵砲の傳來(天文十二年・種子ヶ島・武器戰法築城法等の大變革)

んたためのものであつた。ここに於て、久しく絶えてゐた支那との國交がまた開けたのである。●義満時代の交通【明と交通した理由】義満も亦明と交通した。その理由は(一)明との貿易の利を以て、己

が屬奢の費に充てんと欲したこと。(二)明主は、日本の朝貢を以て無上の光榮としたこと。即ち

當時明主は、義満を稱ぶに日本國王源道義とし、以て一屬國の王として遇した。

【勘合符】當時の海外渡航者は(殊にこれより後、倭寇頼りに彼の地の沿岸を侵す時代の海外渡航者)、幕府より勘合符を得て渡航する掟であつた。而して勘合符は、大内義興がその管掌の任に當つたから、わが貿易船は何れも皆

一旦赤川關に至り、符を大内氏に請はねばならなかつた。大内氏が明國通商の實權を握り、遂に

は朝鮮貿易の權をもその手に收め、富強天下に冠たりし所以は、蓋し此處に存するのである。

【義満が明主に送つた國書】日本准三后某、書を大明皇帝に上る。日本開闢以來聘問を上邦に通ぜざるは

なし。某幸に國釣を乘り海内虞なし。特に往古の規法に遵ひて、肥富を使とし、祖阿を相副へ、好を通じ

方物を献す。金千兩、馬十匹、薄繡千帖、扇百本、屏風三雙、鐵一領、筒丸一領、鯨十腰、刀一柄、硯、宮

一合、文臺一個、海島に漂寄せる者幾許人を搜尋して之を還す。某誠性誠恐頓首々々謹言。

【明主よりの返書】爾日本國王源道義、心王室に存し、愛君の誠を懷き、波濤を喻越し、使を遣はし來り朝

し、通流人を還し、寶刀・駿馬・甲冑・紙・硯を貢し、副ふるに良金を以てす。朕甚だ之を嘉す。今使者道義一

如九遣はし、大統曆を班示し、正朔を奉ぜしむ。

【考察問題】 明主より國書をうけた翌年にも、義滿は更に國書を彼に送つて、「日本國王臣源道義表す」、或は「臣道義誠惶誠恐頓首々々謹言等の、不謹慎・大耻辱の句を用ゐた。いま前記兩國々書を熟讀して、その中から出来るだけ多く、かかる意味の不謹慎・大耻辱の語句を摘出して見よ。

【勘合符】 商船と海寇とを區別せんが爲めに、明より我に交附した手形である。即ち勘合印を捺した一つの紙を折半し、一半を明にとどめて原簿とし、他の一半をわが商船に交附した。即ちわが商船が彼の港に入らんとする時は、件の勘合符を該港の商船檢察吏に示すのだ。するとその檢察吏は、その勘合符の墨色・字號等を、原簿のそれ等と比較檢察し、その結果もし詐りなければ、入港を許すのである。

【義持の斷交】 第四代將軍義持は、父義滿が國體を忘れて明の正朔を奉じたのを大に愧ぢとしてゐたので、明主より再三の國書あるも之をきかず、斷固として往來を拒絶した。

【義持の國書】 今大明國の使臣あり、來りて西國往來の利を説く。然り而して大に不可なるものあり。本國開闢以來、百皆諸神に聽く。神の許さざる所は、細事といふと雖も、而も敢て自ら施行せざるなり。頃年わが先君、左右に惑はされ、肥富が口辯の怨を詳にせず、狼りに船信を外國に通するの間、爾後神人和せず、雨陽序を失ひ、先君次で殞落す……以下略。

⑤ 其後の將軍の時代 【義教】 義持以來暫く明との交通は杜絶へたが、第六代義教の時に至り、又々明は、琉球をして使聘をわが國に促さしめた。そこで彼は之を許し、國書を上りて「日本國王臣源某」と記し、また彼國の正朔を奉じた。

【義政】 第八代義政は、足利代々の將軍中で第一の破廉恥漢であつた。即ち明に對つて財政の窮乏を訴へ、かつ書籍・銅錢等を乞ひ貰ふた。物質の前には尊い精神を奴隸にして、而も恬として恥ぢない奴ではないか。乞食でも嗟來の食は決して食はぬ。ああ彼は畜生だ。足利氏の家運が、この犬の猫以來、加速度的に急斜したのも理だ。

【この後】 義政以後の足利氏は亂世である。されば彼我の國際交通も、互に意に任せぬこと決して少くはなかつた。けれども全然杜絶したと考へてはいけない。否、私的交通の如きは、この亂世を超越して、益々盛んに行はれた。

【考察問題】 (一) 明が頻りに我國に書を送りて使聘を促すのは、その心事の如何なることを暗示するか。

(二) 義滿・義教・義政等が、心から明に臣事したとは、吾等は思ひたくない。然らば何故彼等がかかる耻辱を致したのであらうか。

倭寇

●倭寇 足利氏代々の將軍達が、只管明の歡心を得んきて、日夜これ汲々としてゐた時にあたり、思ふだに痛快な意氣と元氣とを以て、頻りに彼國人を脅かし、以て日東健兒の萬丈の氣焰をあけてゐたものがある。それは倭寇だ。倭とはヤマト即ち日本。よりに倭寇とは、吾等同胞日本人から成る一種の海賊團のことだ。だから誤つてはいけない。賞むべき處は、意氣天を衝くその氣慨だ。侵略盜賊の悪行は何處までも糺彈すべきことだ。

●倭寇の横行した理由 (一)わが國民が天性航海の術に長じておること。然り、扁舟に揖して大洋を縦横自在に乗りまはす放れ業は、わが國民の才と元氣を以てしてなくては到底出来ない藝當だ。(二)文永・弘安の役後、彼國人の柔弱無氣力が遺憾なく曝露されたこと。恰も日清戦争後、從來の長名「眠れる獅子」が、新しい綽名「眠れる豚」に、俄然變じた事と同一體だ。(三)室町時代の中葉以降、國內大に亂れ、従つて一にはわが當局の監視の眼届かず、二には權力主義の思潮全盛を極め三には志を海外に求めんとする風潮盛んであつたこと、實にそれらに起因する。

●倭寇の侵略 倭寇は鎌倉時代或はそれ以前から已にあつたらしい。けれどもそれが全盛を極めたのは、何としても足利の中葉から戰國へかけての時代だ。當時彼等の洋上を横行するや、必ず

「八幡ノ菩薩の旗をおし立てた。蓋し八幡神は武運を司る軍神であるからである。そして朝鮮八道の沿岸は云ふに及ばず、殆ん南北支那の全海岸を荒した。されば彼地の人々は、倭寇の船影を見るや、「バハン船 八幡船 襲來!!」を呼ば號んで、恐れること限がなかつたと云ふ。

【倭寇の戰鬪振り】 支那の古書に(例へば南海、倭寇の事を記して曰く、「倭寇刀を振ふこと神の如。」と。或は「わが軍倭寇の銃砲を開けば、目眩み、耳聾し、天を仰いで空しく走る。」と。また弓、百發百中なることについては、「近づけば必ず發し、發すれば必ず中る。」と。其他「突進するには裸體の儘なり。」とあり、陣法については、「長蛇の陣」、「胡蝶の陣」等とあり、甚だしきは、「倭人よく萬人あらば、大明國を得べし。」等ともある。以て彼等の戰鬪振の一端を窺ふことが出來やう。

●倭寇の取締り 支那は屢々我に迫つて、倭寇の取締りを要求した。けれども國內擾亂の際のわが國だ。放任して之を顧みなかつたが、足利義滿にいたるや、嚴重なる取締令を發した。但し勿論その効果の程は零だつた。

【考察問題】 (一)「長蛇の陣」及び「胡蝶の陣」を研究せよ。(二)足利義滿等が特に嚴重なる取締令を發した理由如何。(三)内に鬱勃たる進取雄飛の意氣、それが外に發露して即ち倭寇だ。されば倭寇は、之を徒に禁

過するよりも、寧ろ適當に善導してやらねばならぬ。然らばその善導の方如何。

朝鮮との交通

●高麗の滅亡

高麗は元の東征に加はつてから、國力大に疲弊し、内は政法愈々亂れ、外は倭寇の侵害益々甚だしく、國勢日に月に振はず、吉野朝廷北還の年には遂に滅亡した。

●朝鮮の建國と我國との交通

高麗に代りて、李成桂(今の朝鮮李王家祖)の朝鮮が代り起つた。その朝鮮

は、やがて使を我國に遣はし、沿海を剽掠するものを禁じ、商船を通せんことを請ふたから、こゝに於て彼我の交通がまた起つた。

歐羅巴人の來航

●歐羅巴人の東方遠征

この頃歐羅巴にては思想上の一大革命あり、從來の守舊・蟄居・宗教萬能の思想は根本的に打破せられて、進取・自由・科學萬能・産業尊重の新思想が開展された。されば諸國は、政治上・經濟上の新領土を求めんとして、或は東方アジア方面に、または西方新大陸方面に、續々として航海遠征した。就中ポルトガル・イスパニヤ兩國最も著しく、實に當時の兩海上王であつた。

●ポルトガル人の來航と鐵砲の傳來

【ポルトガル人の來航】

ポルトガル人は重に東方アジに向つて發展した。即ちわが後土御門天皇の明應七年(二一五八年)、ポルトガル人ヴァスコダガマ、

アフリカの南端を周航して、始めて印度航路を開いて以來、同國人頗りに東洋に出て來り、印度・ペルシヤ等の沿岸地を略して諸處に貿易場を設け、ゴアを以てその中心とし、後奈良天皇の天文十二年(二二二〇三年)には、遂にわが種子ヶ島に漂着した。これ實にわが國に歐羅巴人の渡來した最初である。

【鐵砲の傳來】

その時ポルトガル人は、種子ヶ島時堯(ときたか)に二挺の鐵砲を傳へた。然るに當時あたかも戰國爭亂の世だ。群雄心を専ら武事に用ゐた時代だ。されば此の新來の武器は、大いに世の歡迎をうけ、宛も潮の寄するが如く、忽ちにして全國に瀰漫し、從來の武器たる刀槍弓矢を殆んど驅逐し盡すの勢を示した。勿論之に伴ふて、一騎討の戦法は廢れて集團的の戦法が行はれる様になつた。天險主義の山城は廢れて、五層・七層の天主閣(てんしゅかく)が巍然として雲表(うんべう)に聳ゆる大城廓(おほしろ)の出現を促した。鐵砲の傳來は、實に武器・戰術・築城法の革命の根本動機となつたのである。

【考察問題】 (一)山城と平城との別如何。(二)武器の變革は何故築城法の變革を促すか。詳しく考察せよ。

●イスパニヤ人の來航。ポルトガル人の來航の後僅か數年、天文十八年にはイスパニヤ人も亦來航した。けれども當時の彼等は、ポルトガル人の如く通商貿易を以て第一目的とせず、宗教の宣

布を以て己が唯一最大の任務とした。即ち同年フランススザヴィエルが鹿兒島に於て、天主教(キリスト教、當時キリシタン宗と云つた)を傳へたのを最初とし、爾後宣教師の來航一時殆んど踵を接した。

【練習問題】(一)足利時代に於ける我國諸外國との交通(外語)。(二)天龍寺船(陸士)。(三)日本國王源義(海機)。(四)倭寇(專檢)。(五)鐵砲の傳來(高師)。(六)天主教の傳來(海機)。

第二十章 織田 信長

勃興

信長の祖先 織田氏は平重盛の後と云ふ。代々越前の守護斯波氏に仕へたが(斯波氏に仕越前の織田神社)、信長の父信秀(のぶひで)時、自立して尾張(斯波氏)に移り、清洲(きよす)に城きて之に據り、頻りに羽翼を各方に伸べた。信秀また夙に勤王の志あり天文十一年には伊勢外宮を造營しまつり、同十二年には禁裏(きんり)の築地修理の料を奉り、かくて後奈良天皇の御歡感を忝(かたじけなく)うした。

桶狭間の戦 桶狭間(おけはざま)(實は田樂狭間)の戦は壯烈なるものであつた。信長の性格をそのままに象徴する華々(はなはな)しさ極るものであつた。彼の天下一統史の最初の頁を飾るものとして、またなくふさはしい。それは永祿三年五月のことだつた。(前にも一度述べた)

永祿三年五月、かれて駿・遠に雄視せる今川義元は、ここに愈上洛の事を以し、關東・甲斐・越後等の近隣諸大國の無事なるを機として、四萬五千の大兵を率ゐ、連戦沿道の諸城を陥(おと)して、まさに尾張に攻め入つた。されど輕んずる處には過が生じ易い。彼は頻りに關東・甲越の去就は之を懸念し乍らも、沿道の諸族は之を殆んど度外視した。それらは畢竟、隆車(りゆうぐるま)、双向(すうかう)、蟻螂(あひら)にすぎないと、それが彼の考だつた。そこに彼は隙を作つたのだ。即ち時に年まだ僅か廿七歳の信長が、この隙に乗じて猛襲撃した。精兵を率ゐ、風雨に乗じて、桶狭間の水陣を襲ふたのだ。かくて彼は首級をあげられた。

上洛 上洛の準備 信長大志あり。まづ參河岡崎の城主徳川家康と結び、之をして東面の敵に當らせ、ついで武田信立とも和睦し、以て後顧の憂を絶ち、かくて己は、進みて美濃の齋藤氏を攻め滅ぼし、居城を岐阜に移した。即ち上洛の準備が成つた。

正親町天皇の密勅 時に正親町天皇、信長の武名をきこしめされ、永祿十年(二三二七年)、密に勅使立入宗繼を下し、信長に任ずるに、朝廷及びその御領所復興の事を以てし給ふた。されば恩命に感泣すること限りなく、之より愈々日夜西上の策を案じた。

義昭を奉じて上洛す 偶々前將軍義輝の弟義昭もまた、信長の武名を慕ひ來り投じたから、信

織田信長

<p>勃興</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 信長の祖先(平重盛・父信秀尾張に自立す・信秀の人物) ● 桶狭間の戦(永祿三年・信長) ● 上洛の準備(武田徳川兩氏と和す・美濃より岐阜へ進む) ● 正親町天皇の密勅(永祿十年・立入宗繼・御領所復興の密旨) ● 義昭を奉じて上洛す(同十一年・奸黨驅逐・義昭を擁立す) 	<p>上洛</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 姉川の役(元龜元年・淺井長政及び朝倉義景を討つ) ● 延暦寺焼討(同二年・僧兵を討つ・宗教文化の破壊) 	<p>足利滅亡</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 天正元年・義昭出奔・尊氏以來十五代二百三十五年で滅亡 ● 諸族平定・淺井朝倉兩氏・本願寺・光佐の一向一揆 ● 安土築城(本邦最初の大城廓) 	<p>近畿平定</p>	<p>關東中部平定</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 北條氏(元龜二年氏康卒去) ● 武田氏(信玄卒す)上洛せんとして三方原まで進み信長家康の軍を破る・天正元年信玄卒す、〔長篠の合戦〕勝頼敗軍す、〔武田氏滅亡〕天正十年・天目山 ● 上杉氏(天正六年謙信卒す) ● 毛利氏の強大(山陰山陽十餘國・毛利輝元・吉川及小早川) 	<p>中國平定</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 秀吉の中國征伐、諸城攻落・清水宗治を高松城に圍む・毛利氏の援助により勢強し) 	<p>信長の功業</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本能寺の變(天正十年六月) ● 天下治平の基を開く ● 敬神尊王(皇室・神宮)
---	--	---	-------------	---	--	--

長歡びて之を迎へ、永祿十一年遂に奉じて入洛し、直ちに横暴の徒三好・松永の黨餘を追ひ、愛將羽柴秀吉をして、之等に代りて京都を守護せしめた。またやがて將軍義昭を擁護するに及び、義昭を立てて新將軍とした。即ち第十五代である。

姉川の役と延暦寺の焼討 ● 姉川の役。かくて信長は將軍を奉じた。加ふるに正親町天皇から京都鎮撫の綸旨を賜はつた。されば威望頓に揚り、漸く諸族を壓せんとしたが、この時越前の朝倉義景は、頻りに信長の命に抗ふた。即ち近江の淺井長政、及び延暦寺の僧兵を誘ひて、公然敵意を示したから、元龜元年(二二三〇年)、信長は家康と共に、朝倉・淺井二氏の聯合軍を大

者を、文化進歩の妨害者或は文化の破壊者であるとする。然らば信長は許す可からざる大罪人で

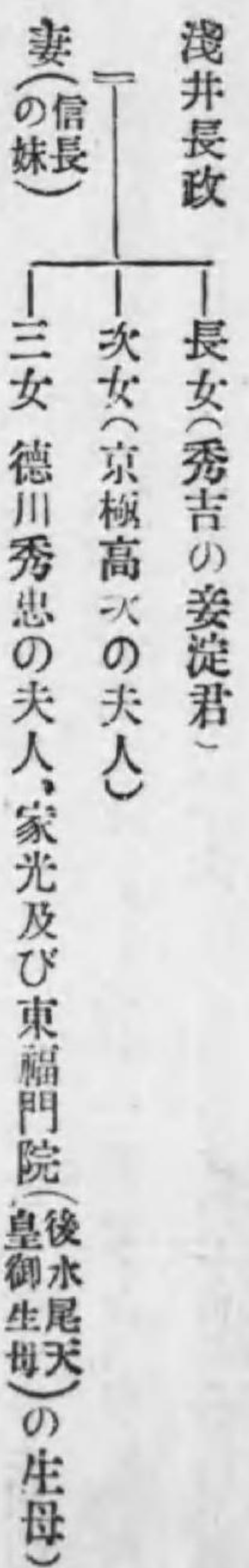
ある。吾人はそこに氣をつけねばならぬ。

【考察問題】 (一) 已習の歴史事實中から、文化妨害者或は破壊者の例を求めよ。(二) 宗教文化を破壊しない様にして、而も僧徒の横暴を抑壓する方策はなかつたらうか。考察せよ。(三) 信長は宗教文化の破壊者ではあるが、政治文化は大いに之を建設した。然らば彼の政治文化の建設とは、如何なることを意味するか。

足利氏の滅亡 信長の威望、かくの如く日に月に盛んなるを見ては、流石に義昭も黙視するこ
とが出来ない。天下織田氏に歸せんことを恐れ、密に後援を上杉謙信・武田信玄・毛利輝元の三英傑
に求め、更に淺井・朝倉兩氏とも結んで、石山・堅田に城くに至つた。されば信長は止むを得ず、
先には殊更使を派して、己が心に異圖なき事を辨明したが而も聽かれなかつたので、遂に斷然意
を決し、柴田勝家・明智光秀の諸將をして、義昭を京都二條城に攻めしめた。勿論義昭は大敗した。
敗れてやがて京都を出奔した。時に天正元年(二二三三年)、尊氏が擅に幕府を京都に開いて以
來二百三十五年、義滿以來征夷大將軍たること十三代約百八十年にして、足利氏がここに滅びた。
近畿平定 諸族平定 この年信長は、柴田勝家と力を協せて、淺井・朝倉兩氏を滅ぼした。ま
たその翌年には、伊勢長島の一向宗徒を平定し、更に天正八年には、大阪石山城に據れる本願寺光

佐の一向宗徒との和睦も成つた。かくて諸族が平定し、近畿が靜穩に歸した。

【淺井長政の妻子】 淺井長政は、妻及び女を信長に托して自殺した。蓋しこの妻及び女は、信長の妹であり
姪であるからである。然るに彼女等は、後に柴田勝家にひきとられ、轉じて更に豊臣秀吉にひきとられた
が、面白いことには、何れも中々立身しておる。



●安土築城 統一の業漸くその歩を進めた。されば信長は、四通八達の要地にして、兼ねて險要
の地なる安土を求め、ここに大いに城きて天下大號令の場所と定めた。抑々この安土城は、天正
四年に工を起し、同七年に成つたもの。規模宏大、結構壯麗、殊にその中央に巍然として聳ゆる大
天主閣、總て之等は、わが國從來の城塞に未だ曾て見なかつた大偉觀である。かるが故に、天然
の險要地に營まれた從來の山城と、絶大なる人力を盡して營まれた新時代の平城との分界線上に
立ちて、わが國築城史上に明かな一時期を劃するものは、實にこの安土城である。

【考察問題】(一)天險主義の城(即ち本邦從)の例を求めよ。(例へば楠木正成の金剛)。(二)山城より平城への推移——わが國の築城史上に、かかる大變革を起した原因如何。前章鐵砲傳來の部を参照して考察せよ。

關東及中部の平定 北條氏 元龜二年、氏康が卒したから、之より北條氏振はず、殆んど恐れるに足らなくなつた。

【武田氏】【信立卒す】 弱輩の將信長に機先を制せられて、甲斐の武田は常にその腕が鳴つてゐた。さればここに奮然駭起、入洛して以て信長を一蹴し、かつは多年の宿望をも遂げんものをと、一には將軍義昭を奉じて、逆賊の讒を避け、二には淺井・朝倉・本願寺等と相結びて、謙信の上洛を牽制し(以上は總て、義昭出奔及び)、而して三には北條氏と相和して、後顧の憂を全く絶ち、かくて元龜三年、甲斐を出で、東海道を西に進み、大學して三方ヶ原に信長・家康の聯合軍を粉碎した。猛虎一度び起ちて奮迅の勢あり、天下の形勢ために一變せんとしたが、惜むべし、病を得て翌天正元年空しく卒去した。

【長篠の合戦】 信立の死は、實に武田氏の最後であつた。即ち信立の子勝頼は、己が器量の程をも顧みず、無謀にも父の志をそのままに襲ぎ、上洛の軍を進めたから、三河長篠に於て、信長・家康の聯合軍に撃破され、剩へ多くの老將・功臣を失つた。

【武田氏滅亡】 勝頼は故山甲府に逃げ歸つた。されど慘敗の將また何事をか成し得べき。天正十年、信長・家康の聯合軍に攻め立てられ、天目山に敗死した。時に部下概ね離散して、従ふ者とは僅かに四十餘人にすぎなかつたといふ。あまりにも悼まじき大豪族の末路ではないか。

【考察問題】 上洛の軍を起すについて、武田氏・上杉氏等が、多年躊躇遠巡容易に決断する能はず、遂に空しく好機を逸したのは何故か。次の項目に従つて考察せよ。一武田・上杉・北條相互間の掣肘牽制の關係、二何れも京都より遠い(即ち上洛の途中に大小無数の豪族が蟠據してゐる)。

【上杉氏】 信立の卒去は、謙信を越後から解放した。即ち後顧の憂全くなく、越後を出でて京都へ上るの自由を與へた。加ふるにこの時彼は、前將軍義昭から、信長討伐の委任を受けた。さればここに意を決し、大學師を起さうとしたが、惜むべし、出發の期にのぞんで又病没した。時に天正六年。

中國征伐と信長薨去 毛利氏の強大。かくの如く、北條(氏康)・武田・上杉の三雄相ついで前後に没し、天下の政權殆んど自ら信長に歸せんとする時にあたり、未だ中國の毛利氏は頑こし

て服従しなかつた。即ち元就の孫輝元は、山陰・山陽十餘國を領有し、且つ叔父吉川元春・小早川隆景に輔けられて、勢中々當る可からず、信長の命に抗ふことも再三であつた。

●羽柴秀吉の中國征伐　ここに於て信長は、羽柴秀吉に大兵を授けて、堂々西へ下らしめた。そこで秀吉は、播州姫路の城を築いて根據とし、之より兵を進めて、三木城(播磨、別所治長)を降し、鳥取城(因幡、吉川經家)を陥し、伯耆の高山に陣して吉川元春に迫り、やがて道を還して備中に入り、清水宗治五千の兵を高松城に圍んだ。

【高松城の水攻】　高松城は、沼澤的な水田を四面に繞らしてゐる。従つて攻めるにしても、馬の駆引等が殆んど出来ない。加ふるに城將清水宗治がよく守る。だから秀吉は持久の策を取り、徐に水攻めにする事とした。即ち城の南に遙かに長堤を築き、川水を導いてその中に湛へた。處が折しも五月雨だ。日毎々々の雨續きに、水嵩は次第に増し、高松の民家は水底に沈み、はては城中にも水がはいつて、兵卒等は、櫓に上り、或は樹の枝に簀子を編上げてその上に坐し、日を送つてゐたと云ふ。何しろ新堤から山麓に至る總面積百八十八町歩餘が、渺茫たる大湖沼に變じたと云ふからおそろしい。流石は豪放の秀吉の策だと思はしめる。

高松城の危急を聞いて、吉川・小早川の兩將は、大兵實に三萬餘を率ゐて來援した。そこで秀吉も亦急使を安土に馳せて、信長の來援を求めた。抑々高松城は、當時、相抗する東西兩大勢力間に横はる極めてデリケートな一分界線を成してゐた。信長の天下一統の業が成るか敗れるか、毛利氏が信長の壓政を甘受するか覆すか。高松城は實にその大問題の如何を決定するパロメーターをなしてゐた。

【考察問題】　秀吉の警戒嚴にして、堤防を決潰すこと容易ならず、高松城の救援到底覺束なきを見るや、吉川・小早川の兩將は、1 備中・備後・美作・因幡・伯耆を織田氏に割讓すること、2 高松城將清水宗治の生命を保全すること、この二箇條件を提出して、秀吉に和議を求めた。けれども秀吉はこの和議を拒絶した。よりて問ふ。この間の消息が暗示する1 高松城の重要さ、2 毛利氏の隱忍自重政策、3 秀吉の壮志の詳細を。

●本能寺の變　秀吉の豪快な戰鬪振りを傳へ聞いては、安土の信長も、流石に一方ならず喜んだ。されば援軍の請をうけ取るや、快く諾して直ちに西征の軍を起し、親しく之を督して、まづ明智光秀を先發させ、己はその子信忠と共に、安土を發して京都に入り、その夜信長は本能寺に宿り、信

忠は妙智寺に宿つた。然るに光秀はかねて信長を恨んでゐた。主命否み難く、丹後大江山を越えて老阪までは進んだが、心進まず馬進まず、不平遂に抑へ難く、急に馬首を左へ還して京都路をとり、六月二日未明には早くも本能寺を襲ふて信長を攻め殺し、やがて直ちに二條城(光秀叛す寺から此處)に信忠をも攻め殺した。ああ大度なき人は何時の世にても度し難い。原因の如何にかかはらず、暗殺的行爲そのものは、武士にあるまじい卑怯なことだ、さうして社會秩序の大破壊者大罪惡者だ。

【考察問題】 (一)光秀の行爲を批判せよ。(二)信長の缺點を研究せよ。(三)敵本(敵は本能寺に在り)主義の意味如何。

信長の功業 ●天下治平の基を開く。應仁の亂以來百二十年、麻の如くに亂れた天下は、之を平定するに只々信長の力を待つより外はなかつた。即ち當時の時勢は、深謀遠慮大政治家の器量の家康よりも、明敏豁達奇計百出の秀吉よりも、快刀亂麻の大天才の信長の出現を待つと頗る切なるものがあつた。この意味に於て、彼の功業の第一は、天下治平の基礎を確立したことでありと云はねばならぬ。

●敬神尊王 信長はまた敬神尊王の念に厚かつた。即ちその在世中、皇居を修造し、朝儀の廢れた

るを興し、供御の料を献じ、伊勢神宮の造營を企てる等、功蹟が甚だ多かつた。

【考察問題】 (一)天下の政權は、逸早く京都に入りて、以て皇室を奉戴した英雄の手に歸したことを玩味せよ。(二)道義地を拂ひたる戦國時代の政變すらも、常に皇室を中心として行はれたことを玩味せよ。

【練習問題】 (一)三方ヶ原の役(鹽竈)。(二)安土城(女高師)。(三)信長の敬神尊王の事實及びその國史的意義(陸士)。

第廿一章 豊臣秀吉(天下一統)

山崎の合戦 ●秀吉急遽歸る。六月三日、本能寺の變報、秀吉の陣營につく。よりに秀吉大いに驚き、喪を秘して發せず、急に毛利氏と和し、疾風迅雷の速さを以て兵を收め、直ちに高松城を後に東上した。

【毛利輝元の義心】 秀吉東上の後聞もなく、輝元は本能寺の變を知つた。されど彼は、義を重んずる心情の高傑な將であつた。即ち秀吉の術策を咎めず、また秀吉の軍を追撃しなかつた。

【徳川家康の遠慮(?)】 偶々安土に在つた徳川家康も亦、本能寺の變を聞くと共に、光秀討伐の兵を起さう

<p>山崎合戦 ●秀吉急遽歸る(高松城より) ●光秀を山崎に破る(光秀戦死) ●原因(秀吉の威望)光秀討伐後、 〔柴田・瀧川等の將秀吉を嫉む〕</p>	<p>賤ヶ岳の戦 ●戦況(天正十一年・柴田佐久間兩將と争ふ・七本槍・柴田敗走す) ●結果(秀吉の威望益々高し) ●原因(秀吉對信忠及び家康)</p>	<p>小牧・長久手戦 ●戦況(天正十二年・對陣に終る) ●結果(秀吉・家康兩雄の提携)</p>	<p>四國 ●長曾我部元親・天正十三年平定</p>	<p>九州 ●島津義久・同十五年平定</p>	<p>關東 ●北條氏政父子・同十八年平定</p>	<p>奥羽 ●伊達政宗以下の諸族平定</p>	<p>蝦夷 ●松前氏の入朝・松前慶重・天正十六年 ●小笠原島の發見(小笠原貞頼・文祿二年)</p>	<p>豊臣秀吉の天下統一</p>
---	--	---	-------------------------------	----------------------------	------------------------------	----------------------------	---	------------------

とした。けれども部下の兵寡く、従つて到底明智軍に當る可からざるを知つたから、謀臣の言を容れて、間道より伊勢に赴き、海に航して郷國駿河に歸つた。確に彼は、泣くまで待たう杜鵑だ。

●光秀を山崎に破る。時に光秀は、織田氏の一族を追ふて、安土城に在つたが、秀吉東上の報を聞き、之を邀へ撃たんとて、兵一萬五千を率ゐて山崎に陣した。けれども大人と子供との對陣よりもつと懸隔の著しい對陣だ。脆くも破れて、己が領邑近江の坂本に走らんとして、遂に土人に殺された。時に六月十三日。

【三日天下】 明智は可愛い大將だつた。即ち本能寺に信長を攻め殺すや、直ちに京都には所司代をおいた。

民心收斂の方策としては、租税を免除し、或は諸大寺に祠堂銀を給した。そしてやがて安土城を占領するや、金銀財寶を掠めて大いに論功行賞を行ふ等、御自分一人ではすつかり日本の新主人に成りました氣であつた。然るに奴さん、山崎の合戦には脆くもお敗れになつた。本能寺の大得意後僅か十三日だ。だから世人は、旬三公方(十三日將)と云ひ、三日天下(ほんの東の間の天)と云ひ、また「四日目は明智日陸(光秀と日)の守となり」と云つて彼を揶揄する。主君に又向ふたとは云へ、罪のない坊ちゃん的な又向ひかただ。

賤ヶ岳の戦 ●原因 【秀吉の威望】 光秀誅に服するや、秀吉は諸將を會して後事を議し、信長の嫡孫秀信を立てて織田氏を襲がしめ、又信長の遺領は、次子信雄(尾張)、三子信孝(美濃)、及び柴田勝家(越前・瀧川一益(伊勢)等の諸將に分ち、己も丹波をとつた。かくて之より彼の威望獨り頼に高まつた。

【諸將秀吉を嫉む】 されば柴田勝家・瀧川一益等の宿將老臣は不平一方ならず、秀吉を除かんとして信孝と相結び、各々領邑に歸つて兵を起した。

●戦況 信孝の軍はまもなく岐阜に一蹴された。また一益の軍も伊勢長島に惨敗したが、勝家の

軍は、かの名高い賤ヶ岳に據つて勢頗る強かつた。即ちそれは天正十一年のことだ。彼はその領邑越前より、謀を遠く中國の毛利氏と通じて、以て秀吉挾撃の策をとり、加賀・能登・越中三國の兵を率ゐて近江に出で、佐久間盛政と共に、賤ヶ岳に陣取つた。けれども當時秀吉の幕下には、福島正則・加藤清正・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・片桐且元・糟谷武則等、鬼をもひしく勇將多士濟々なるものがあつた。所謂賤ヶ岳の七本槍だ。だからその槍先に追ひまくられ突きまくられて、流石の賤ヶ岳も遂に陥り、勝家は越前北莊(今福井)に逃れて敗死した。

●結果 信孝は自殺した。一益は力盡きて降参した。云ふまでもなく秀吉の勢は旭日昇天だ。

●小牧・長久手の戦 ●原因 やがて信長の次子信雄も亦、秀吉排斥の運動を開始した。そして援を家康に求めた。蓋しこの頃、秀吉の大望は漸く露骨になつて來てゐたに違ひない。

●戦況 天正十二年、家康まづ兵を發して尾張小牧山に陣すれば、秀吉亦大軍を起して同樂田に對陣する。かくて戦が開けた譯だ。けれどもこの戦たるや、家康・秀吉の兩雄は、互に敵機を相窺ふて容易に干戈を交へない。虚々實々、互に氣合は氣合を呑んで……と云へば外聞もよいが、何としてもあつけないことだ。いつの間にか戦争終結ミ來た。

【戦争終結の様様】 秀吉やがて、家康を撃破することの容易ならざることを知るや、退いて伊勢に赴き、信雄を攻めて之を降し、以て己と家康との和を講ぜしめた。賢い(?)策戦ではないか。處が家康の賢さは、もつとそれ以上だから面白い。即ち己が兵力は遙かに秀吉以上に在ることを知りながら、而も尙ほ萬一を慮つて軍を動かさず、殊に甚だしきは、秀吉退却の際すらも、遂に之を追はなかつたと云ふ。

【長久手の戦】 兩雄相互はともかく、兩雄の部下相互は、勿論所在に二三相戦ふた。その最も著しいのは、秀吉の部將池田信輝が、間道より家康を衝かんとして、反つて家康の軍に長久手に撃破されたことだ。而して之を長久手の戦と云ふ。されば長久手の戦とは、いはば小牧の戦の一部分と見るべきだ。

【考察問題】 (一)家康・秀吉の兩雄が、互に大事を取つて、遂に殆んど相戦はなかつたのは何故か。(二)小牧・長久手の戦を、嚴島の戦及び山崎の戦と併せて、戦國時代の三大義戦と稱するは何故か。

●結果 秀吉は、明敏豁達にして能く情勢を視、機に臨みて奇計百出し、家康は、慎重にして事態を知り、謀慮深遠にして誠に大政治家の器量があつた。されば小牧の戦の後、兩雄互に提携せるは、まさにこれ海内一統の完成そのものを意味する。果せる哉、秀吉は天正十三年、關白に任ぜられ、やがて後陽成天皇立ち給ふや、太政大臣に任ぜられ、また豊臣の姓を賜はつた。

四國平定 四國にては長曾我部元親勢威あり。小牧・長久手の戦に際しても、根來・紀伊の僧兵等と協力して、信雄及び家康を援ける等、あくまで秀吉に敵對した。されば天正十三年、弟秀長に大兵を授けて南伐せしめ、やがてまもなく出で降らしめた。

九州平定 九州にては島津義久勢威あり。大友・龍造寺諸族を破り、九州併呑の概を示して、秀吉の命に抗ふことが屢々であつた。よりにて秀吉は天正十五年、諸道の兵二十萬を率ゐ、水陸相携へて九州に攻め入つた。勿論、義久は只管恐れ謹み、髪を削り櫛衣を纏ふて降参した。

關東平定 やがて天正十八年には、秀吉は、徳川家康を先手の將とし、東海・東山兩道から、北條氏政(氏康の子)及び氏直(氏政の子)を小田原城に攻めた。壘を石垣山に築き、己れここに在りて、小田原城を瞰下しつつ全軍を督し、悠揚迫らざる長圍の策は、高松城の攻圍そのままの豪放さを思はしめる。敵味方の諸將、誰かその威風に壓せられずるやうか。かくて城陥り、氏政は自殺し、氏直は降参した。

【小田原評定】 小田原籠城の時、城内では、諸將相會して策戰を議したが、連日只徒に議論百出するのみ、遂に全く要領を得なかつた。秀吉の攻撃が悠長だから、城内の防禦評定も悠長なのか。さりとて敵の骨頂

ではないか。言葉は同じ悠長でも、外と内とは賢愚の大反對だ。だから今でも、情氣漫々而も結局長談議に終る會議を、小田原評定といふ言葉でよんでおる。

【考察問題】 (一)小田原攻圍の際、秀吉は諸將に命じて、各々妻子を陣地に招かしめた。何のためか。(二)従來秀吉の諸將を降すや、領地の一部は必ず之をその諸將に残した。然るに北條氏討伐の際は、領地の全部を沒收して、少しも假借する處がなかつた。何故か。(三)北條氏討伐の後、家康は新に關東を興へられ、かくて一躍二百五十萬石の大々名となつた。よりにて問ふ。秀吉は何故にかくも家康を優待したか。(一優待のやむを得なかつたこと、(二)懐柔政策)

奥羽平定 ここに於て、伊達政宗以下多くの諸族も、續々來りて秀吉に降つた。

松前氏の入朝と小笠原の發見 わが國の植民史は、秀吉のこの時代に、極めて意義深い二つの事實を載せておる。一は蝦夷地への進展にして、他は小笠原島の發見である。

●松前氏の入朝 天正十六年、蝦夷の松前慶廣入朝す。蝦夷とは今の北海道で、當時主としてアイヌ人の巢窟であつたもの、(内地人も勿論半島の)、而して松前氏は、内地人の部長として、また兼ねて廣く蝦夷地の長として、勢威あつた地方的一大豪族である。

●小笠原島の発見 文祿二年、小笠原貞頼は小笠原島を発見した。元來小笠原島は、面積が小さい、地が僻遠である。けれども蔑視してはいけない。何よりもまづ國防的見地から、それは太平洋方面の重要策源地である。また小さくあればある程、僻遠であればある程、発見者の勇氣及び才に對して、益々景仰の念が起るからである。

【練習問題】 (一)豊臣秀吉(女高師)。 (二)賤ヶ岳の戦(高師)。 (三)小牧の戦(外語)。 (四)草履取つたり天下取つたり。

第廿二章 豊臣秀吉(政治、建築及美術工藝)

政治 ●五大老 秀吉また意を内治に用る、當時の權臣徳川家康・前田利家・毛利輝元・宇喜多秀家・上杉景勝の五人を大老に任じ、五奉行の上に班して、大事を議決せしめた。

●五奉行 また前田玄以・石田三成・淺野長政・増田長盛・長束正家の五人を奉行に任じ、實際の政治を分ち掌らしめた。

●文祿の檢地 【檢地の必要】 秀吉は強固なる財源を地租に於て求めんとした。處がそれについて

てはまづ檢地の必要がある。即ち公平な地租を徴收せんがためには、豫めまづ全国各地を詳細に公平に検査するの必要がある。



段とし、或は三百六十歩・三百歩・二百五十歩等ありて一定しなかつた。ここに於て秀吉は、之

【三百歩一段制の確立】 檢地の結果の第一は三百歩一段制の確立であつた。抑々群雄割據の時代に於ては、各領主は、各その領土内を限りて便宜の度量衡を用ゐてゐたから、土地廣狹の標準が區々として一定しなかつた。即ち同じく一步と稱び乍らも、或地方では方六尺五寸、他の地方では方六尺三寸、またその他では方六尺二寸五分・方六尺一寸・方六尺等と一定せず、従つて同じく一段と稱び乍らも、或は九百歩を以て一

を以て著しく不都合となし、長東正家を主任として、全國の土地を測量せしめ、やがて方六尺三寸を以て一步とし、三百歩を以て一段とするの制を確立した。之を文祿の檢地(文祿四年)、天正の檢地(天正十七年)又は太閤の檢地等(天正十七年)といふ。

【石高の制の確立】 檢地の結果また石高の制が確立した。即ち鎌倉以來、地租は錢を以て納めしめ、之を貫高の制(例へば青砥左衛門の莊園三萬貫、相模入道の領地廿七萬七千貫等)と稱したが、ここに至りて新に石高の制(家康の百五十五萬七千石)を定め、地租は所領石高の幾分をとりて納めしめることとした。

【諸大名の所領石高】 文祿の檢地の結果、諸大名の所領域の大小は、次の様に明瞭に、石高を以て表はされることとなつた。(括弧内の數字は石高、單位萬石)

徳川家康(二五・七)、毛利輝元(一一〇・五)、上杉景勝(一一〇)、前田利家(八三・五)、伊達政宗(五八)、宇喜多秀家(五七・四)、島津忠恒(五五・五)、佐竹義宣(五四・五七)、小早川秀秋(五二・二五)、加藤清正・長曾我部盛親・淺野長政・増田長盛・福島正則・小西行長・石田三成・黒田長政・織田秀信・加藤嘉明・外二十二大名は十萬石以上五十萬石未満。以下省略。

【貨幣の統一】 戰國擾亂の世のこととて、貨幣の制度全く廢れ、當時行はれたものは、支那から

渡來した永樂錢及び各領主の私錢等で、廣く全國的に通用し得るものは殆んど無かつた。元來貨幣制度の紊亂は、國家財政の紊亂である。國家及び國民の生活に對する大脅威である。さればこそ秀吉は、天正年間、全國劃一の大判・小判・丁銀等の鑄造を行つた。これ即ち後世、天正大判・天正小判等と稱するものである。

建築 ●大阪城 豪華雄大なる秀吉の性格は、まづ大阪築城となつて表はれた。東に大和川、北に淀川、西に大阪灣を控ふる四通八達之地、兼ねて天險の地なる石山城(本願寺光佐の據つた處)址を選び、ここに天下の財力を傾けて、結構壯麗・規模宏大・海内無双の名を耻しめない大名城を築き上げた。時に天正十二年。

●聚落第 やがて天正十五年には、京都内野の地に、結構善美の聚落第を營んだ。翌十六年、足利氏の室町第及北山第の古例に法り、後陽成天皇の行幸を仰ぎ奉るや、駐紮五日、饗宴善美を盡し、また皇室に料奉り、領邑を公卿・門跡に頒つた。或は金銀を諸將に分與し、かつ誓約、關白殿仰せ出さるる趣、何等の儀に於ても、聊かも違背を存す可からざる事、を誓はしめたのもこの時だ。蓋し、この聚落行幸の大盛儀は、一には泰平の兆を天下に示して、萬民をして亂世の状態

を忘れしめること、一には皇威の盛んなるに伴ひて自家の権勢の盛んなることを示し、諸大名を初め天下萬民をして歸する所を知らしめること、その目的實に其處にあつたと云はねばならぬ。

●桃山城 文祿二年にはまた桃山城が竣工した。當時の桃山城は、金城湯池の固め、瓊殿玉樓の觀、華美實に壯麗を極めたこと云ふ。瓦の端に黄金を塗り、百間の廊下に黄金の燈籠を釣り、長押・鴨居を黒漆にて塗り、その上に蒔繪を施したとも云ふ。さにかく秀吉そのままの豪華雄大であつたに違ひない。わが美術工藝史が、特に秀吉の時代を名づけて桃山時代と云ふのは、その時代的特徴が、桃山城の建築に於て最も多く發揮されておるからである。

【桃山城の断片】 豊臣氏滅亡の後、徳川氏は桃山城を毀つて、その殿舎門廊を各地に移した。西本願寺の唐門・飛雲閣・書院の鴻の間、豊國神社の唐門、近江竹生島神社の唐門、大徳寺の唐門等は、何れも桃山城の断片である。吾等はそれらの断片を纏めて、桃山城の昔を偲べればならぬ。

【桃山時代の稱呼】 秀吉は桃山城を築いて其處にゐたから、秀吉時代を桃山時代とも云ふ。同様に信長時代を安土時代とも云ひ、また織豊時代を安土桃山時代とも云ふのである。

●方廣寺 天正十九年、京都東山阿彌陀峯の下に、方廣寺大佛成る。役を廿一ヶ國に課し、材を

九州・紀伊・土佐・信濃に徴し、五年の日子を費したもので、堂の高さ廿五間(奈良東大寺と同高)・桁行四十五間餘・梁間二十八間餘と云ふ大規模である。蓋し方廣寺建立の目的は、一は民間の武器押収に在つたらしく、天正十六年には、果せる哉、天下の寺院・及び百姓の兵器を悉く收めて、釘・鋸等を作つておる。遮莫さあはら後秀頼が鑄造した木寺の巨鐘が、かの名高い「國家安康」の因業者だ。建立の時、流石の秀吉も、そこまじは夢想だもしなかつたに違ひない。

美術工藝 秀吉は豪華華麗を好んだから、その影響を蒙つて、當時の美術工藝品も亦豪華華麗を以て特色とする。繪畫には狩野永徳・同山樂等の名手あり、彫刻には左甚五郎・源助・是閑等が著しい。その他、尙武の世とて装劍具・鏢・甲冑等の名工も現はれ、茶湯の流行に伴ひては、鑄・漆・陶の諸方面にも多くの名手をいだした。

【狩野永徳】 狩野元信の孫。筆力勁健、規模宏遠、彩色濃艶、總てそれらに於て、足利時代の畫風とは著しく趣を異にしておる。秀吉に寵せられること深く、従つて桃山城や聚落第に多くの作を遺した。

【左甚五郎】 この時代から徳川時代初期にかけての人。桃山城及び聚落第には、その承塵・欄間等に多くの作を遺してゐる。彼の懸腕については、今更謀々を要すまい。日光東照宮の「眠り猫」を思へ、「見ざる言はざる

聞かざるの三様」を思へ、而してまた「鳴き龍」を思へ。それだけでも充分だらう。

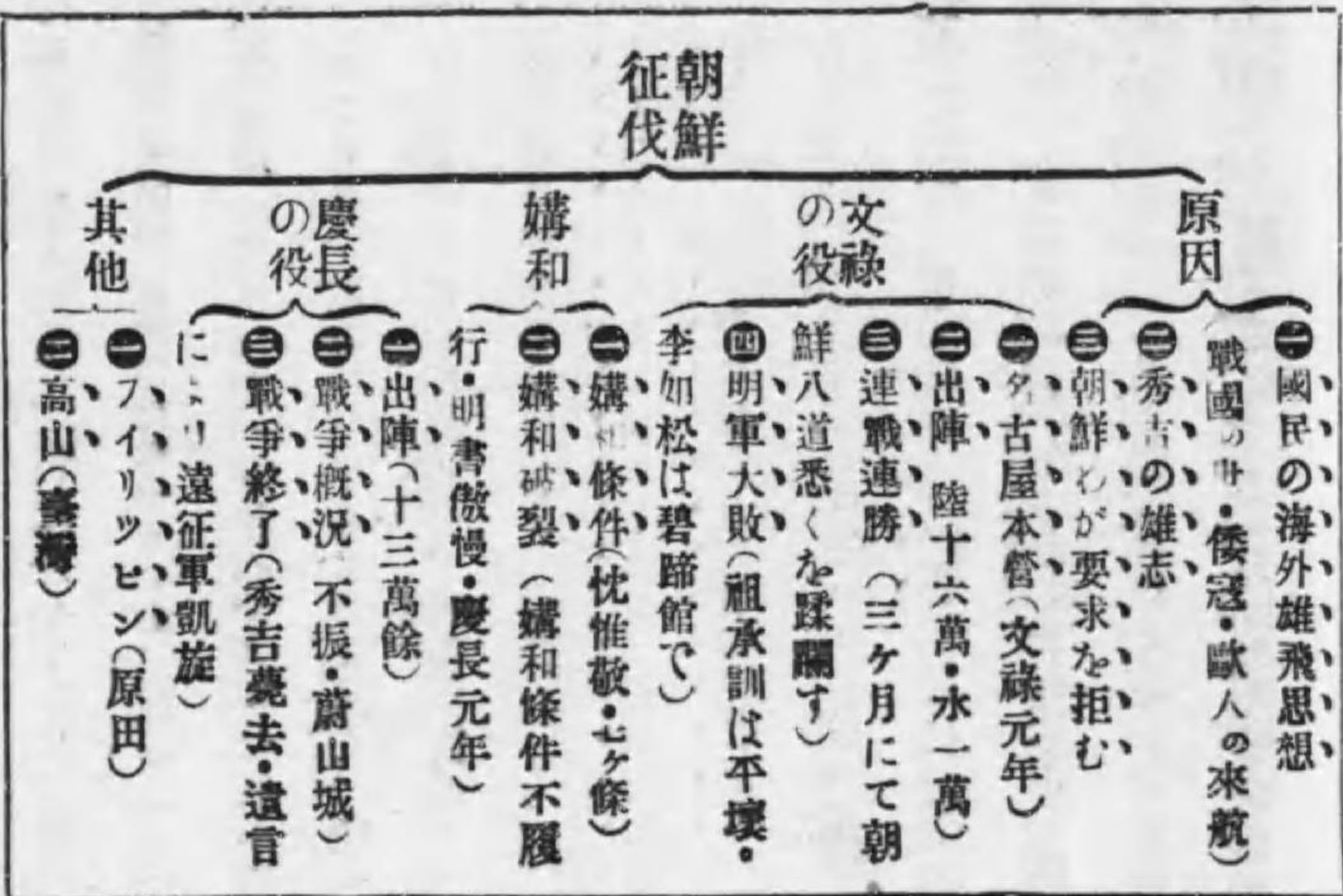
【瀧助・是閑】 當時は足利時代同様能樂が流行した。能樂には假面を要する。假面彫刻の名手が此二人だ。

【茶の湯】 千軍萬馬の間を馳驅來往する諸將卒が、當時は盛んに、狭くろしい四疊半の茶室で、形式萬能主義の茶の湯の遊びに、しびれをきらし苦味を味はつて、而してそれらを喜んでゐた。秀吉の如きもその一人だ。豪華雄大の彼の四疊半お行儀、思ふだに痛快なコントラストではないか。

第廿三章 豊臣秀吉(朝鮮征伐)

原因 國民の海外雄飛思想 當時のわが國民の對外思想は、實に豁達進取そのものであつた。これ一つには、國內に横溢せる尙武の精神に醗酵されたこと、二つには、豪放勇武の倭寇を私に彼等が慕ふこと、三つには、ポルトガル人・スペイン人等の來航に伴ふて、彼等の世界觀念が著しく擴くなつて來たこと、主にそれらに起因するのである。

秀吉の雄志 當時の豪放なる國民思想は、その陣頭に豪放なる秀吉を推戴し得た、然り秀吉は、海内漸く一統するや、ここに海外雄飛の念やみ難く、遂に大明國をも併呑せんと企つるに至つたのである。



【秀吉の雄志】 かつて中國の毛利氏討伐の時、信長は秀吉を勵まして曰く「征討の功成らば、悉く中國を以て汝を賞せん。」と。然るにこの時、秀吉は答へて曰く「中國の如きは、之を以て麾下の將士に與へんのみ。臣更に進みて、九州を平げ、朝鮮を圍り、明國を窺ふべし。」。勿論この説は確據がないから、俄に信することは出来ない。されど當時のわが國民の風潮を考へ、更に秀吉の性格を考へ、また其の後年の偉業に徴する時は、この説も一概に抹殺し去ることは出来ない。

朝鮮王が要求を拒む よりて秀吉は、使を朝鮮に遣はし、王李偕に諭して征明の嚮導たらしめんとした。然るに李偕は、明を恐れてわが要求を拒絶した。だから秀吉、激怒したのも理だ。明國併呑に先つてま

づ朝鮮を懲さうと、彼はかやうに決意した。

【秀吉が李昭に送った書】…余、胞胎の時に當りて、慈母、日輪懷に入ると夢む。相士曰く「日光の及ぶ所昭臨せざるなし。壯年必ず八表仁風を聞き、四海威名を蒙らん、それ何ぞ疑はんや」と。此の奇異あるによりて、敵心をなす者自然備滅し、戦へば則ち勝たざるなく、攻むれば則ち取らざるなし。已に天下大に治まり、百姓を撫育し、孤獨を憐愍す。故に民富み財足り土人古に萬倍す。本朝開闢以來、朝廷の盛時。洛陽の丘觀此の日の如きは莫きなり。夫れ人の世に生るるや、長生を歷ると雖も古來百年に充たず。暫くとして久しくここにおらんや、國家の山海の遠きを隔つるを以て肩とせず。一度び越えて直ちに大明國に入り、わが朝の風俗を四百餘州に易へ、帝都の政化を億萬斯年に施さんば方寸の中に在り。貴國先驅して入朝す。遠き處あるによりて、近き憂なきものか…。

文祿の役 名護居の本營 是に於て秀吉は、奏請して關白職を養子秀次に譲り、己れは太閤と稱して、肥前名護屋(東松浦郡)に至り、親しく軍事を督した。徳川家康・前田利家・上杉景勝・蒲生氏郷・伊達政宗等の諸將、大兵を率ゐて左右に屯す。握齧としてただ國內に相攻争した群雄割據時代の昔に比すれば、ただ想ふだけでも痛快ではないか。忽必烈以上のわが忽必烈が、立海の怒濤

澎湃たる彼方に、廣莫無限の大陸諸國を睥睨しつつ、悠然と白髮を撫しておる。痛快ではないか。時に文祿元年(二二五二年)である。

●出陣 總大將は宇喜多秀家、先鋒は第一軍の小西行長、第二軍の加藤清正之を承はり、黒田・島津・福島・小早川・毛利の面々陸軍の諸將たり、總勢凡そ十六萬餘人。また水軍には、九鬼嘉隆・藤堂高虎・協坂安治・加藤嘉明の諸將あり、總勢凡そ一萬餘人。軍船幾千、何れも家々の紋所つきたる幕打ち廻し、思ひ思ひの旗おし立てて、威風堂々纜を解いた。ああ軍神マースの率ゐる兵そのものだ。

【諸軍編成】 ●陸軍 第一軍、小西行長(七千人)・宗義智(五千人)等、計一萬八千七百人。第二軍、加藤清正(一萬人)・鍋島直茂(一萬二千人)等、計二萬二千八百人。第三軍、黒田長政(五千人)等、計一萬一千人。第四軍、島津義弘(一萬人)等、計一萬四千人。第五軍、福島正則(四千八百人)・長曾我部元親(三千人)等、計一萬五千人。第六軍、小早川隆景(一萬人)・立花宗茂(二千五百人)等、計一萬五千七百人。第七軍、毛利輝元(三萬人)。第八軍、宇喜多秀家(一萬人)・對馬在陣。第九軍、羽柴秀勝(八千人)等、計一萬一千五百人。豊岐在陣。以上總計十五萬八千七百人。 ●水軍、九鬼嘉隆(一千五百人)・藤堂高虎(二千人)・脇坂安治(一

千五百人。加藤嘉明(七百五十人)等、總計九千二百人。

●連戦連勝 水軍の戦況は概して目覚ましくなかつたけれど、陸軍は連りに勝ち、釜山上陸後僅か廿餘日にして、早くも京城に攻め入つた。勿論王も王子も逃げだした。よりて行長は王(李昭)を追ひ、平安道に進みて平壤を陥れ、清正は二王子を追ひ、咸鏡道會寧府に進みて之を擒にした。全く、向ふ所に敵なき様だ。僅か三ヶ月、殆んど一兵をも損せずして、而も朝鮮八道を風靡した。流石は多年鍛へに鍛へた將卒達だ。

●明軍大敗 【祖承訓敗る】 王李昭は京城を逃れ出で、明に赴いて急を告げたので、やがて明將祖承訓は、兵を率ゐて來襲した。されど平壤に小西行長がある。明將輩にどうして一指も觸れさせやうぞ。鮮かに此處に明軍を撃破した。【行長破らる】 敗軍の明は、やがて媾和の使節沈惟敬を、平壤なる小西行長の許に遣はした。けれども之は卑劣極まる彼國の術策であつた。即ち媾和の提議によりて、まづわが軍に油斷を起さしめ、次でひそかに李如松に大軍を附して、わが平壤を襲はしめたのである。かくて行長は破られて、やむなく平壤を退却した。【李如松敗る】 時に開城に小早川隆景がゐた。平壤が失はれたと聞いて激怒一方ならず、碧蹄館に明軍を邀へ、立花宗茂・毛

利秀包等と共に、僅か二萬の兵を以て、十萬に餘る明軍を大いに撃破した。

●媾和條件 是に於て明國愈々畏れて和を求める。而してわが將士の中にも、久しく異域に在りて、戦に倦む者があつたから、沈惟敬等はこの機に乗じて休戦を約した。かくて、やがて秀吉は媾和條件七ヶ條を提出し、その承諾を要求した。

- (一) 和平誓約相違なくんば、天地縱へ盡くと雖も改變ある可からざるなり。然らば即ち大明皇帝の賢女を迎へて、日本の后妃に備ふべきこと。
- (二) 兩國年來間隙によりて勘合近年斷絶す。此の時之を改め、官船・商船往來ある可きこと。
- (三) 大明・日本通好變更ある可からざる旨、兩國朝權の大官互に誓詞を題す可きこと。
- (四) 朝鮮に於ては、前驅を遣はして之を追伐す。今に至りて彌々國家を鎮め、百姓を安んぜんがために、其將を遣はす可しと雖も、此の條目の件々領納するに於ては、朝鮮の逆意を願ひず、八道を割分し、四道並に國城を以て朝鮮國王に還す可し。
- (五) 四道は已に之を返投す。然らば即ち朝鮮王子並に大臣一兩員、質として渡海ある可きこと。
- (六) 去年朝鮮王子二人、前驅の者之を生擒とす。その人非凡の間之を舊國に歸す可きこと。
- (七) 朝鮮國王の權臣、累世違則ある可からざる旨、誓詞之を書き可し。

●媾和破裂 然るに沈惟敬等中に居て、媾和條件を變更し、一も之を實行しない。のみならず慶

長元年(二二五六年)の明の國書中には、封レ爾爲ニ日本國王とあつた。

爾豊臣平秀吉、海邦に崛起して中國の尊きを知り、四、一介の使を馳せて欽慕來同し、北、萬里の關を叩きて懇に内附を求む。情已に恭順より固く、思は懐柔を斬しむべし。茲に特に爾を封じて、日本國王と爲し、之に誥命を錫ふ。……爾其れ、臣職の當に修む可きを念ひ、恪循要束、皇恩の已に渥きに感じ、欺誠を替ふることなく、祗みて綸言に服し、永く聲教に遵へ。欽めよ。

あ何と云ふ國際上の没道義漢ぞ。何といふ陋劣ぞ。而してまた何といふ不遜傲慢ぞ。秀吉が冕服を脱して地に擲ち、「我れ日本國王たらんと欲せば、何ぞ明の封冊を待たんや。」と、怒髪天を衝き、背も裂けよとばかり、外道畜生國の明を睨みつけたのも、理あると云はねばならぬ。かくて當然平和は破れた。征討の大命令はまた直ちに下された。

慶長の役 ●出陣 翌慶長二年、小早川秀秋總大將たり、毛利秀元・宇喜多秀家を之が副とし、黒田孝高を參謀とし、加藤清正・小西行長を先鋒とし、總勢凡そ十三萬、肥前名護屋を解纜した。軍の編成はほほ前役と變りがない。

●戦争概況 されど戦況概して振はず、我軍の蹂躪した處は、只々忠清・全羅・慶尙の三道に過ぎなかつた。尤も加藤清正及び淺野幸長等の蔚山籠城、島津義弘の泗川の大勝利は、本役中稀に目覺ましい大活躍であつた。

【蔚山籠城】 慶長二年十二月、明軍大舉して、淺野幸長の蔚山城を攻め圍んだ。よりて加藤清正、幸長を援けて共に籠城したが、時あたかも寒威凜烈の候、積雪山を成し、凍死する者も少くなかつた。加ふるに糧食に窮し、將卒皆、或は紙を噛み、壁土を煎じて喰ふ等、苦況到底名狀す可からざるものがあつた。されども屈せず。翌三年正月、毛利・小早川・黒田・小西の援軍到來して、攻圍の明軍を撃退するまで、遂に支へた。勇將の面目躍如たるものがあるではないか。

●戦争終了 慶長三年六月、秀吉伏見城にて病に罹る。時に外は大陸征伐の師意の如く振はず、内は諸將密に黨をなして相鬭ぎ、加ふるに嗣子秀頼年甫めて七歳、従つて父の大業を繼ぐことが出来ない。さればその死に臨むや、遺言して外征の師を還さしめた。前後七年に亘つた大業が、遂に空しく水泡に歸したことは、返す返すも遺憾のことである。

秀吉の雄志 秀吉は管に朝鮮及び明を併呑しやうと欲してゐたばかりでない。海外雄飛の彼の大志は實に素晴らしく、南は高山(臺灣)及びフィリッピンの征服までも志してゐた。遮莫溢

3 室町幕府衰亡期（應仁の亂以後、第百五代正親町天皇の天正元年足利氏滅亡の頃までの間に於て、細川・三好・松永等諸權臣の下、越上の專權に伴ふ幕府の衰亡、朝廷の御衰微、群雄の蜂起、歐羅巴人の來航等の諸事件を含む時代）。

4 安土桃山期（足利氏の滅亡以後、第百六代後陽成天皇の御代の豊臣秀吉薨去の頃までの間に於て、織田信長の天下一統・豊臣秀吉の天下一統・同朝鮮征伐・桃山文物の發達等の諸事件を含む時代）。

時代の特徴に關する問題

一、近古後半の二百六十五年間は、概して争亂の繼起停むことのない時代であつた。著しい争亂も順舉せよ。またかかる争亂の時代を作るに至つた根底的原因を探究せよ。

二、左の各期の時代の特徴を、括弧内の諸項目に基いて考察せよ。

1 吉野期（吉野朝廷が、お痛はしき程の御衰微にあらせられ乍らも、而も尙ほよく亡び給はず、天晴れ正統たるの御尊嚴を常に確保された基礎的諸因素）。

2 室町幕府隆盛期（1 室町幕府興隆の次第。2 既習諸時代の文物に對する室町時代の文物の諸特徴。3 興中に亡の徵あるは世の常、然らば室町時代は、その隆盛期に於て如何なる衰因を醸しつゝあつたか）。

3 室町幕府衰亡期（1 室町幕府滅亡の次第。2 下越上の風潮を表はす諸實例）。

4 安土桃山期（1 織田信長の政治的手腕の長所及び短所、並びにその具體的實現。2 豊臣秀吉の政治的手腕の長所及び短所、並びにその具體的實現。3 既習諸時代の文物に對する桃山時代の文物の特徴）。

諸種の問題（左記の各項につきて述べよ）

(一) 建武の中興の成立及び廢頽の次第（專檢・高師・外語）。

(十) 足利末年より維新頃までに渡來せし重なる西洋人十名、及びその大要の説明（高商）。

(二) 後村上天皇時代の天下の大勢（海兵）。

(十一) 戰國時代に於ける四大義戰の概要（陸士）

(三) 皇紀二〇五二年に起りし事件（專檢）。

註：川中島・嚴島・山崎・小牧。

(四) 吉野に於ける史的事實（高師）。

(十二) 元龜・天正年間に於ける群雄割據の形勢を別圖に記入せよ（海兵）。

(五) 室町幕府と關東管領との關係顛末（專檢）。

(十三) 元龜・天正年間に於ける著名なる戰跡とその原因結果の概略（商船）。

(六) 古河・堀越兩公方の起原（高校）。

(十四) 比叡山に關する史實（陸士）。

(七) 後北條氏の興亡（高校）。

(八) 室町時代に於ける外交の大要（外語・高工）。

(九) 始めて我國に來りし歐人及び其年代（高師）。

近古史(後)年表

吉野朝廷時代(一)

吉野(一)期

醍醐後

元弘 三(一九九三)……天皇伯耆より京都に遷幸し給ふ
 護良親王征夷大將軍拜命
 建武 元(一九九四)……建武中興、護良親王鎌倉に幽閉され給ふ
 二(一九九五)……北條時行の亂、護良親王弑害され給ふ
 足利尊氏叛す
 同 (同)……足柄・箱根の戦
 延元 元(一九九六)……天皇延曆寺に幸し給ふ。尊氏の入京及び西走。多々良濱の戦
 同 (同)……尊氏大舉入京す。澹川の戦。尊氏光明院を擁立す
 同 (同)……天皇吉野に遷幸し給ふ
 同 二(一九九七)……金ヶ崎落城、皇太子恒良親王捕へられ、尊良親王・新田義顯等戦死す
 北畠顯家鎌倉を衝く
 同 三(一九九八)……恒良・成良兩親王弑せられ給ふ
 北畠顯家・新田義貞戦死す

吉野朝廷時代(二)

吉野(二)期

村上後

龜山後

小松後

延元 三(一九九八)……尊氏擅に幕府を京都に開く。懷良親王征西將軍に任ぜらる
 同 四(一九九九)……北畠親房神皇正統記を上る
 興國 二(二〇〇一)……僧疎石の勤により、天龍寺船を元に遣はす
 正平 三(二〇〇八)……四條畷の戦(正行戦死す)
 同 四(二〇〇九)……足利基氏鎌倉に下る(關東管領の始め)
 同 九(二〇一四)……北畠親房薨す
 同 一三(二〇一八)……足利尊氏死す。新田義興矢口に誘殺せらる
 同 一四(二〇一九)……菊池武光筑後川に少貳頼尚を破る
 同 (同)……義詮吉野に迫る。天皇觀心寺に幸さる
 元中 八(二〇五一)……足利義満、山名氏清を滅ぼす
 同 九(二〇五二)……吉野の朝廷、京都に遷幸し給ふ(後龜山天皇神器を後小松天皇に傳へ給ふ)
 高麗亡ぶ。李成桂朝鮮を建つ
 應永 元(二〇五四)……義満軍職を子義持に譲り太政大臣に任ぜらる
 同 四(二〇五七)……金閣成り義満之れに移る
 同 五(二〇五八)……三管領・四職を定む

(三) 代時府幕町室

(2) 期亡衰府幕町室

104 後奈良

天文 四(二一九五)……大内義隆即位の資を献す
 同 五(二一九六)……踐祚後十年にして即位の禮を行ふ
 同 一(二二〇三)……ポルトガル商船、種子ヶ島に來り鐵砲を傳ふ
 同 一八(二二〇九)……キリスト教宣教師ザヴィエル鹿兒島に來り天を傳ふ
 同 二〇(二二一一)……大内義隆、陶晴賢に害せらる
 同 二二(二二一四)……北條氏康古河を陥る
 弘治 元(二二一五)……川中島の前役。毛利元就、陶晴賢を嚴島に滅ぼす
 同 二(二二一六)……上杉謙信・北條氏康兩雄、上州に對陣す
 同 三(二二一七)……ポルトガル人澳門を取る
 永祿 元(二二一八)……木下藤吉郎、信長に仕ふ
 同 三(二二二〇)……桶狭間の戰
 同 四(二二二一)……毛利元就即位の資を献納す
 同 五(二二二二)……川中島の後役。宣教師グイレラ京都に於て耶穌教を弘む
 同 德川家康と織田信長、相盟約す

(四) 代時府幕町室

代時山桃土安

一)

(1) 期山桃土安

(3) 期亡衰府幕町室

105 正親町

永祿 八(二二二五)……松永久秀、將軍義輝を弑す
 同 (同)……西班牙人、フィリッピン諸島を取る
 同 一〇(二二二七)……織田信長御料所興復の勅を拜す
 同 一(二二二八)……信長、足利義昭を奉じて入京し、之を將軍となす
 元龜 元(二二三〇)……信長、内裏を修理す。姉川の戰
 同 一(二二三一)……信長、長島の一向一揆を征す。叡山の燒討。北條氏康卒す
 同 三(二二三二)……三方ヶ原の戰。天主教盛んに九州に行はる
 天正 元(二二三三)……足利氏滅亡。朝倉・淺井・三好氏滅亡
 同 武田信玄卒す
 同 三(二二三五)……長篠の戰
 同 四(二二三六)……安土城成り、信長之に移る。大阪の一向宗徒を討つ
 同 五(二二三七)……中國の役治まる
 同 六(二二三八)……上杉謙信卒す
 同 八(二二四〇)……本願寺光佐降り、大阪一向一揆平定す
 同 一〇(二二四二)……武田氏滅亡。高松城水攻。本能寺の變。山崎合戰

(二)代時山桃土安

(2)期山桃土安

同	天正一一(二二四三)……賤ヶ嶽の戦。織田信長自殺す。秀吉入 阪城を築く
同	一二(二二四四)……小牧長久手の戦
同	一三(二二四五)……秀吉の四國平定。秀吉従一位關白に任 ぜらる。秀吉五奉行をおく。秀吉南蠻 寺を毀つ
同	一四(二二四六)……秀吉、徳川家康と和す。聚落第成る 秀吉太政大臣に任ぜられ、臣姓を賜 はる。方廣寺を造り、佛殿を建つ 秀吉朝鮮に舊交を求む
同	一五(二二四七)……九州平定。秀吉聚落の第に移る。天主 教を禁す
同	一六(二二四八)……天皇聚落第行幸
同	一七(二二四九)……秀吉檢地をはじめ、使を琉球に遣はす
同	一八(二二五〇)……秀吉、山科田舎供御の料として献す。 小田原征伐。家康を關東の地に封す。 家康江戸城に入る
同	一九(二二五一)……秀吉書をフイリッソンの太守に與ふ。 秀吉關白職を養子秀次に譲る。征韓の 令を下す。五大老をおく
文祿 元(二二五二)	征韓諸將を部署す。名護屋出師。 京城陷落。二王子を捕虜にす
同	(同)……明人沈惟敬和を議す

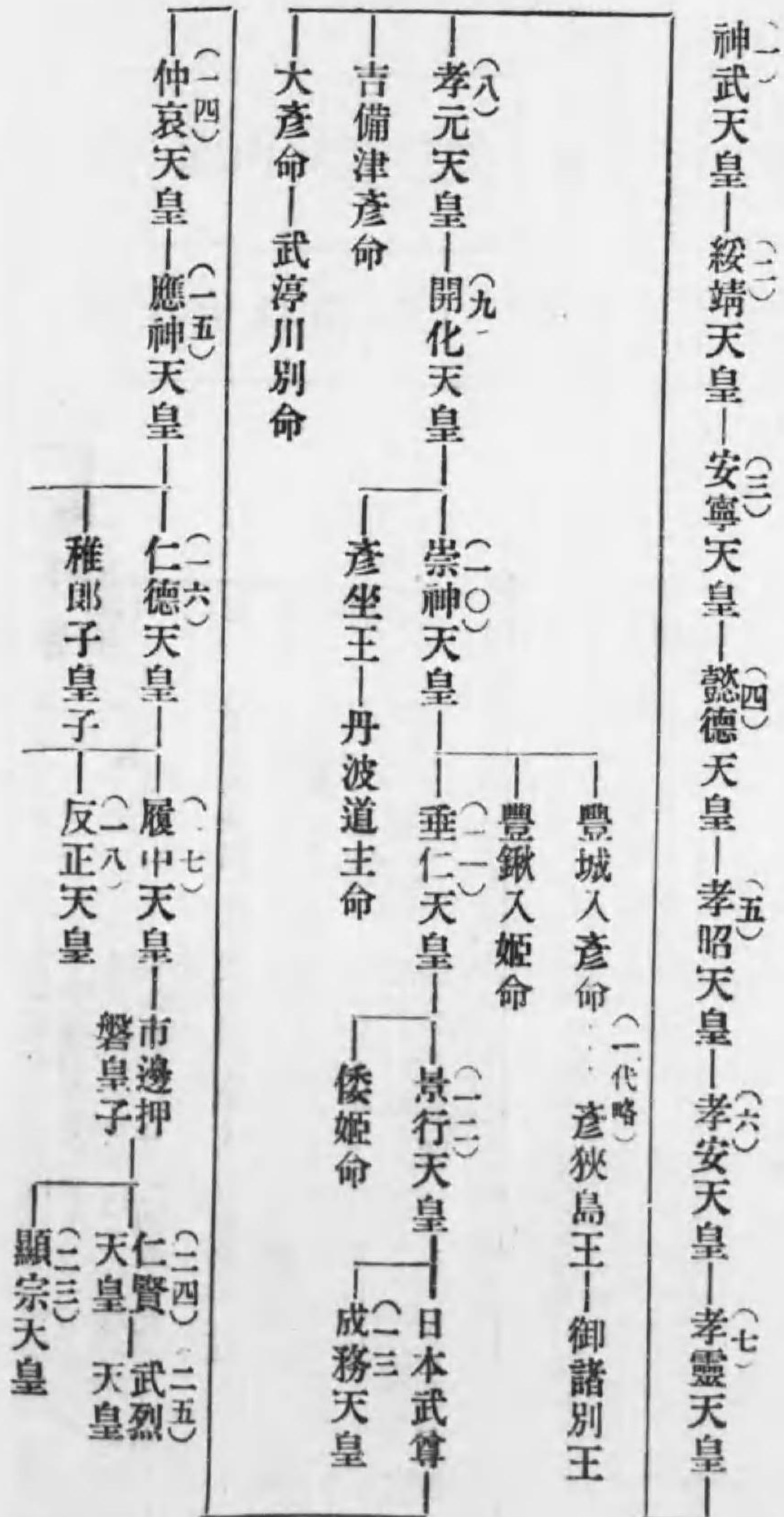
(三)代時山桃土安

(3)期山桃土安

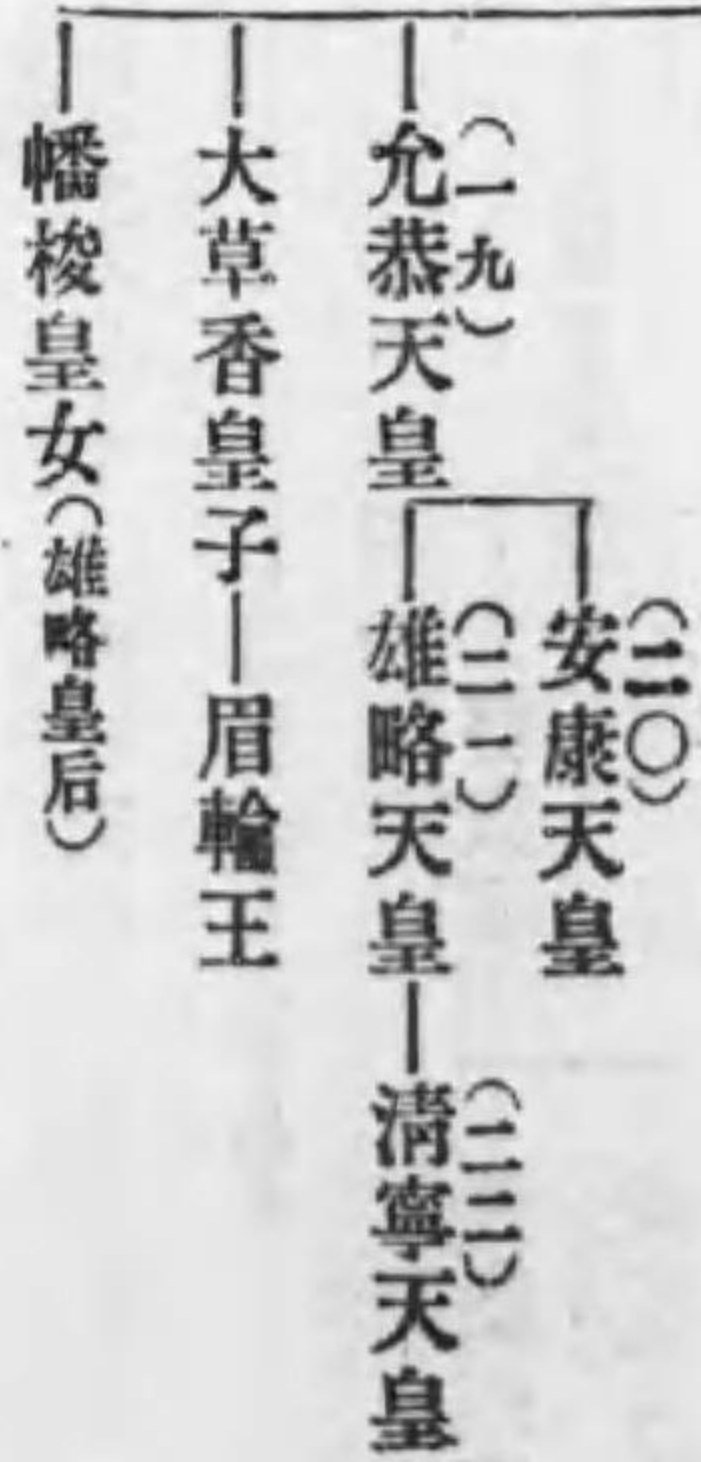
106
御陽成

文祿 二(二二五三)	碧蹄館の戦。小西行長 沈惟敬と和議 す。諸將釜山に歸る
同	(同)……明使來りて和を請ふ。秀頼生る。秀吉 書を臺灣に送りて服従を促す。小笠原 島發見
同	三(二二五四)……伏見城を築く。耶蘇教徒を利す
慶長 元(二二五六)	明使伏見に來る。諸將凱旋す。和議敗 る
同	二(二二五七)……再び征韓軍を出す。蔚山の戦
同	三(二二五八)……後事を家康等に托して秀吉薨す。家 康・利家等相議して在韓諸侯を召し還 す。泗川の戦

皇室御系圖



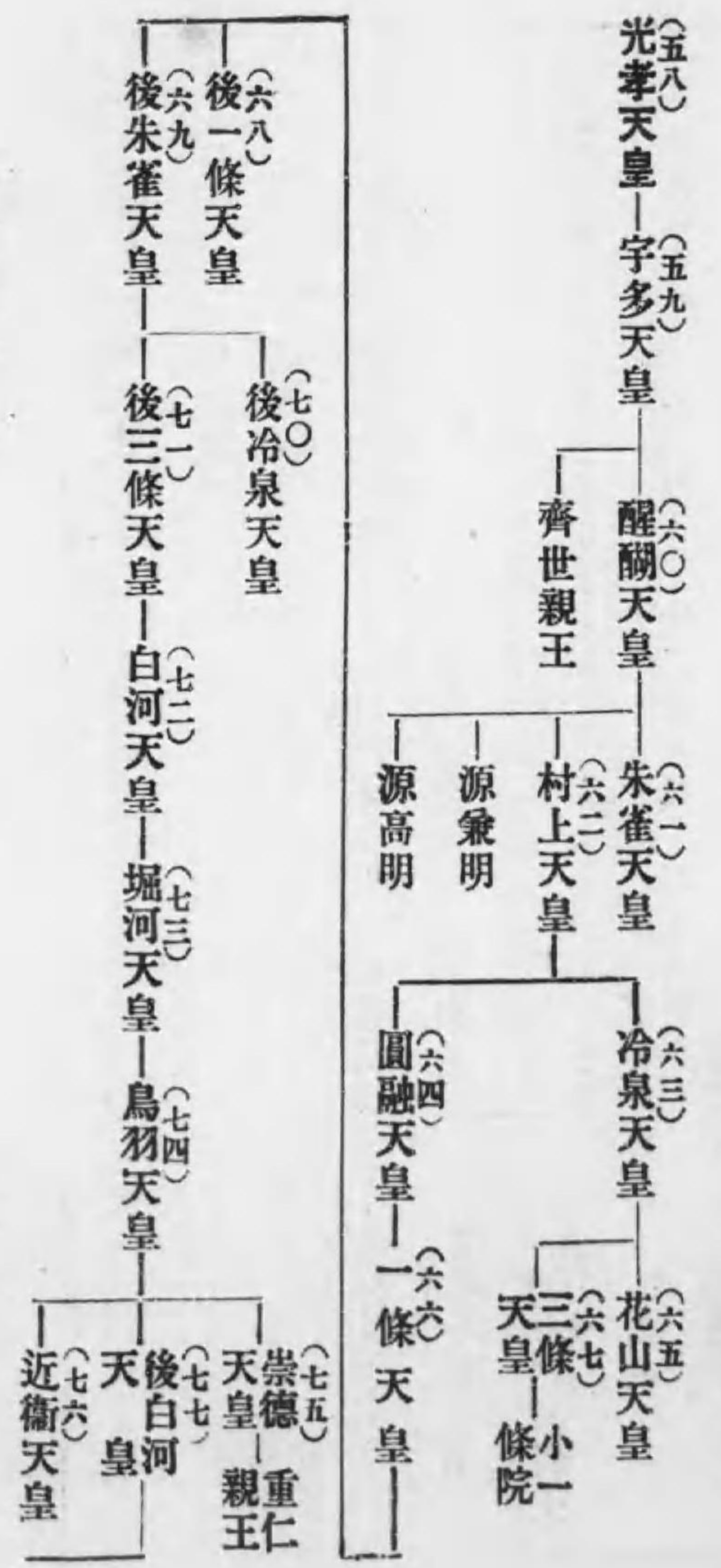
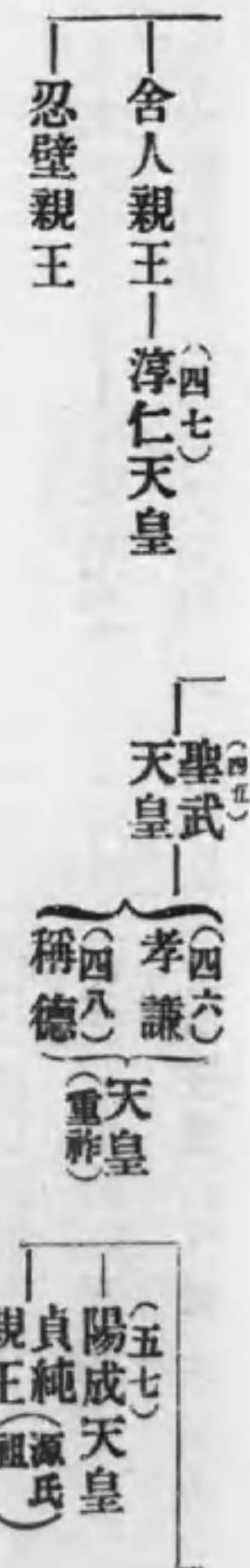
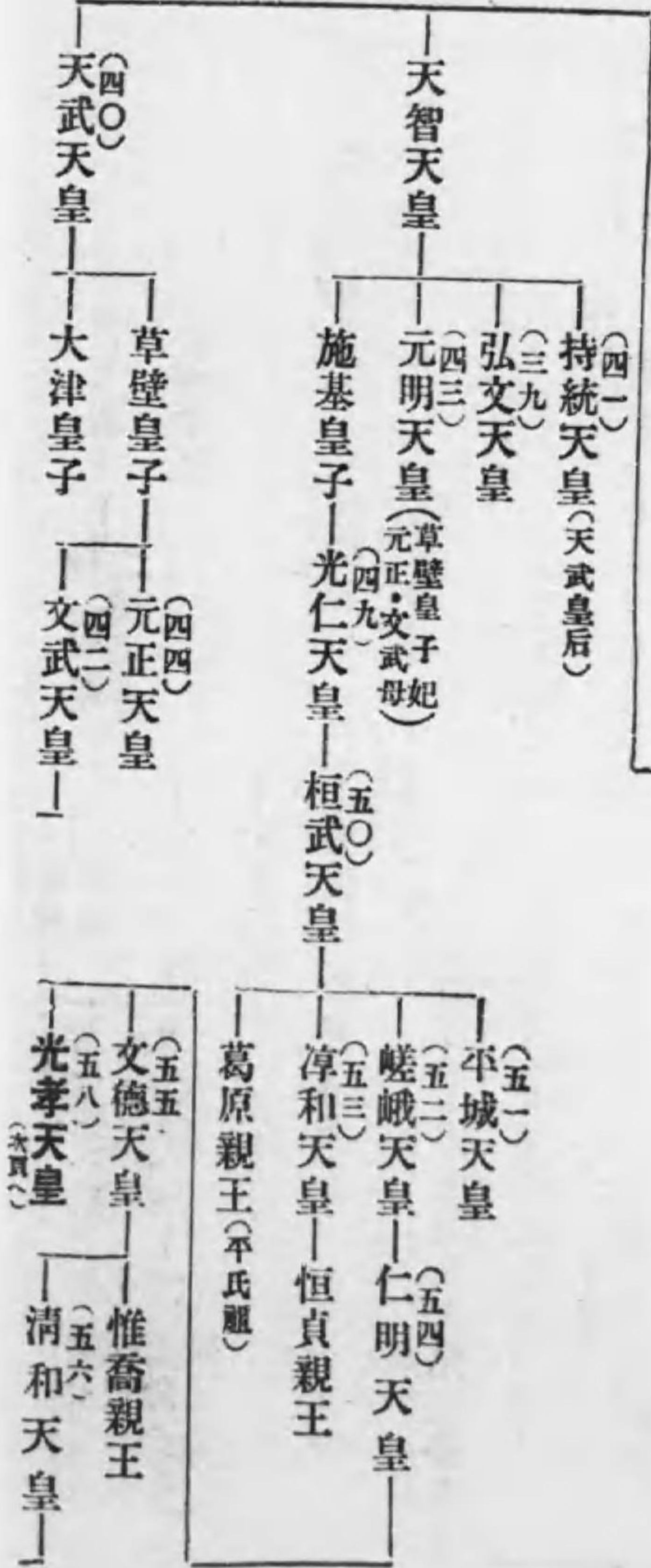
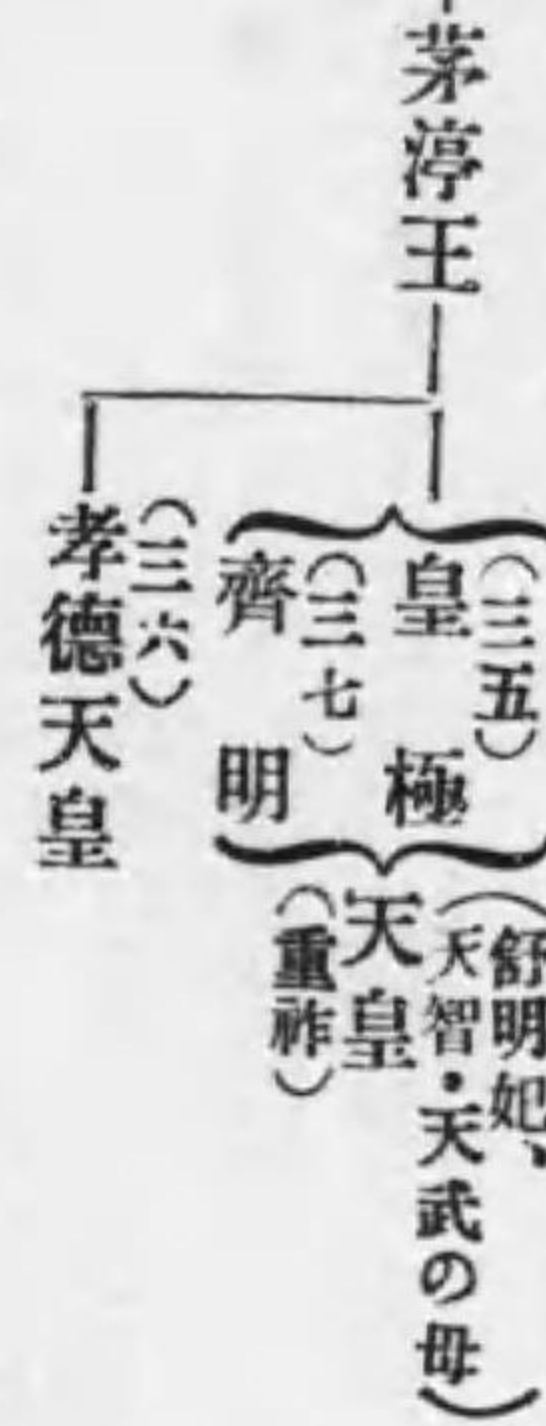
稚野毛二派皇子

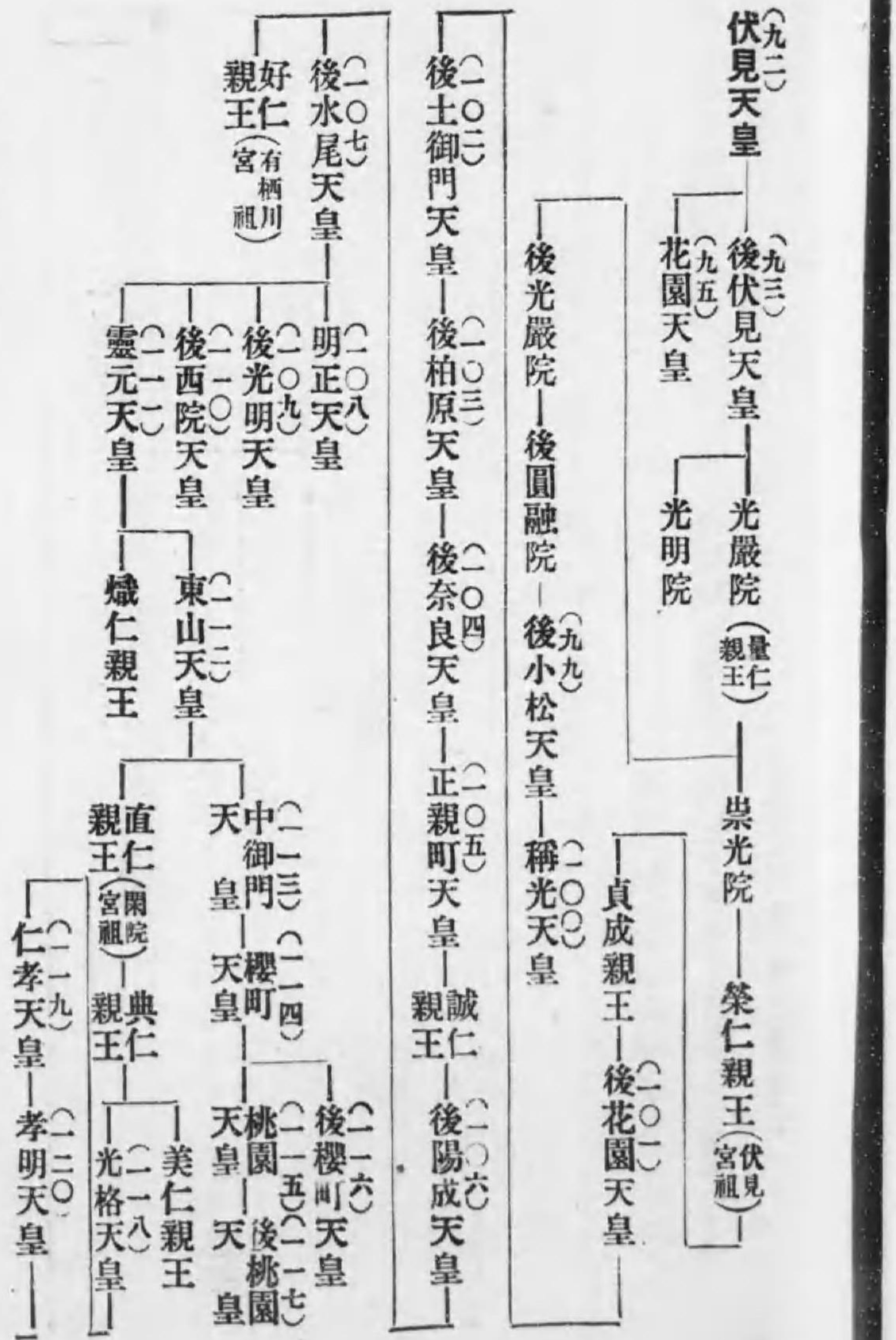
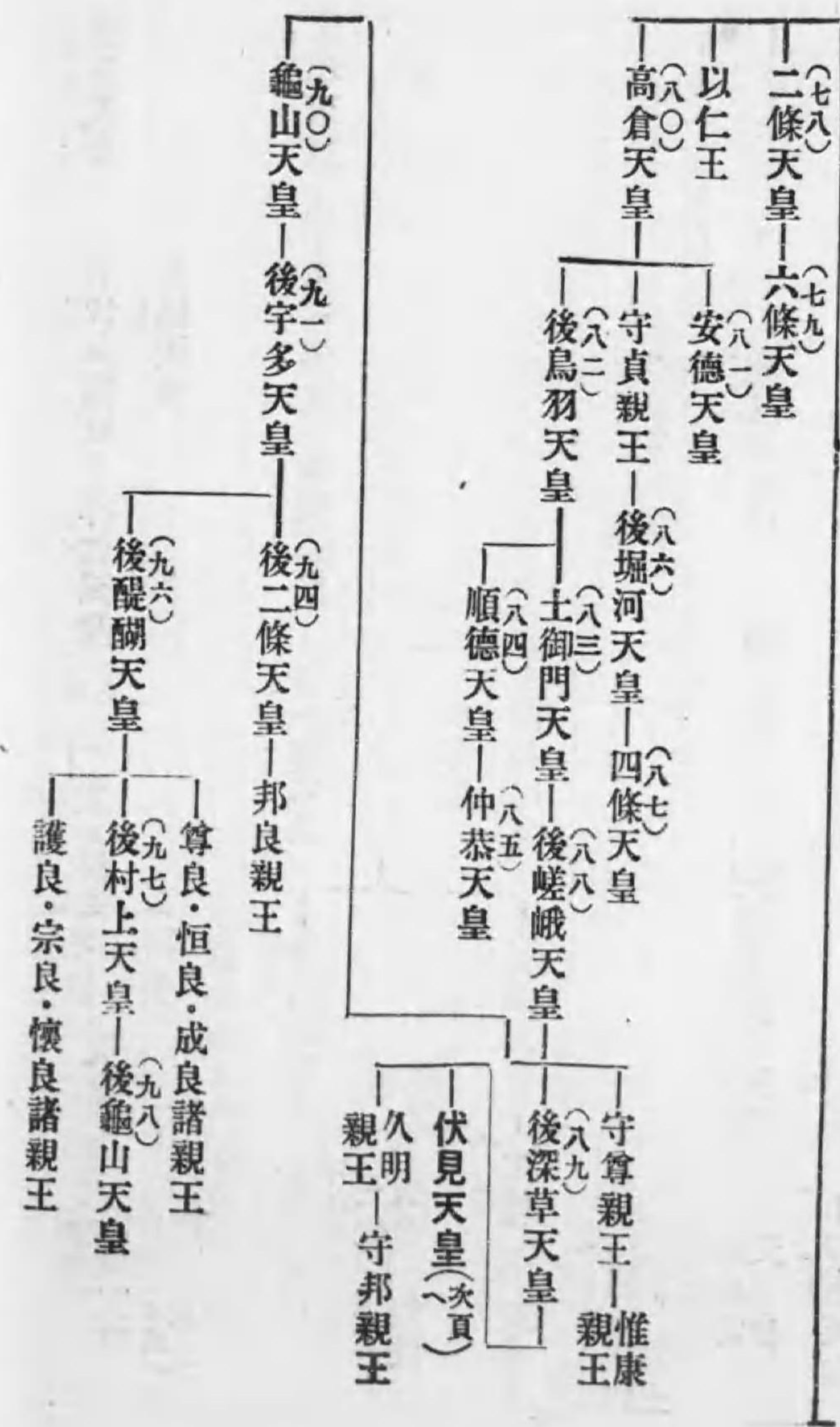


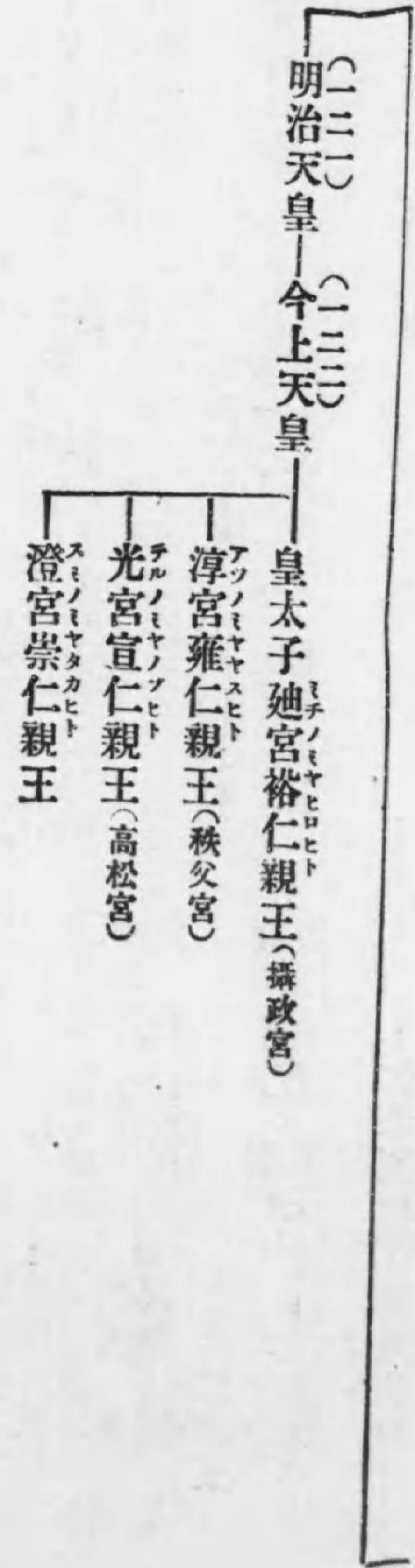
稚野毛二派皇子



舒明天皇 (三四)







諸氏系圖

大伴氏

天忍日命 (二代略) : : : 道臣命 (六代略) : : : 武持 — 室屋 — 談 — 金村 — 咋

長德 — 安磨 — 旅人
家持
吹負 — 牛養

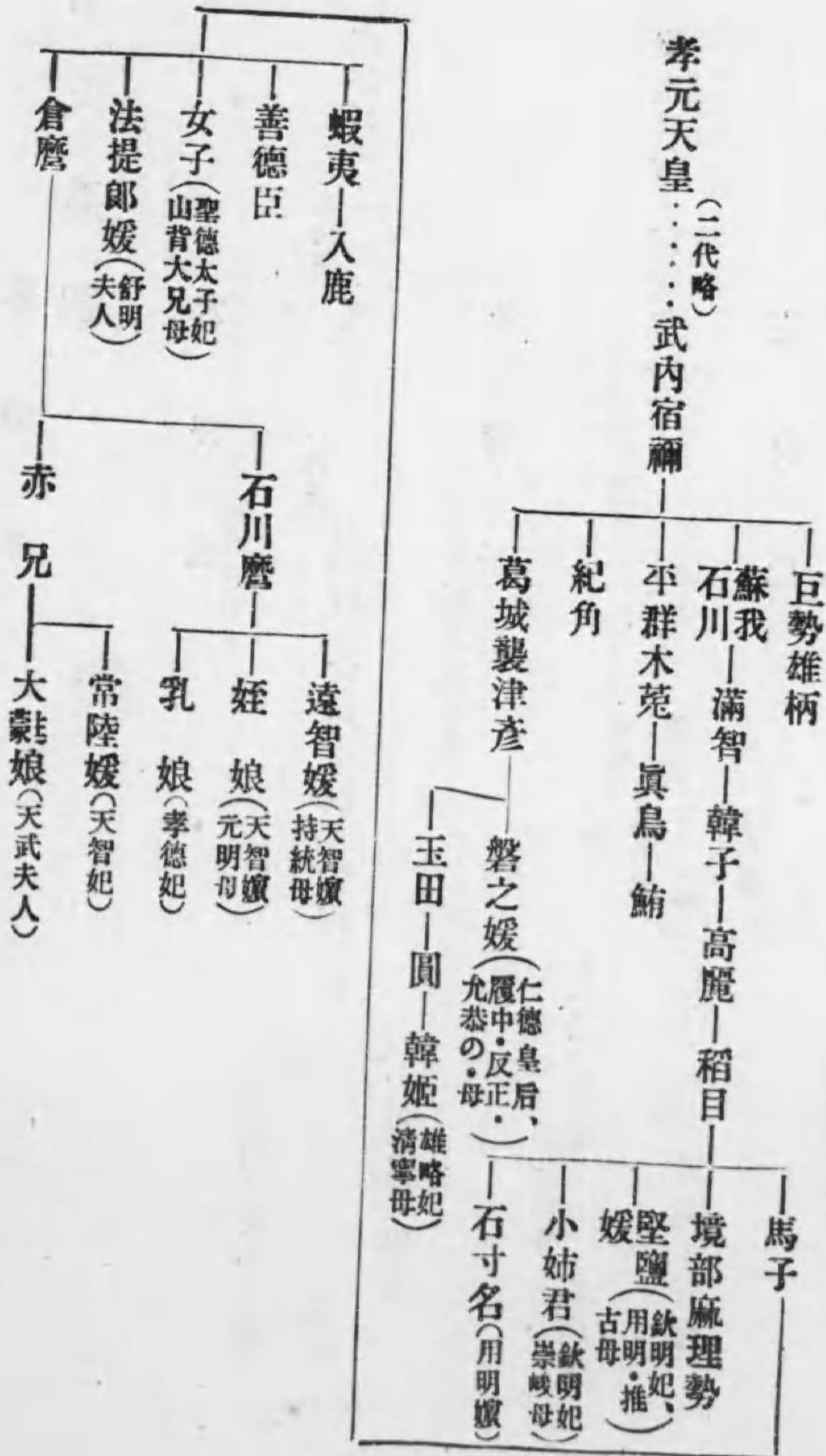
物部氏

饒速日命 — 可美真手命 (五代略) : : : 十千根 (二代略) : : : 伊莒弗

布都久留 (二代略) : : : 麤鹿火
目 (一代略) : : : 尾輿 — 守屋

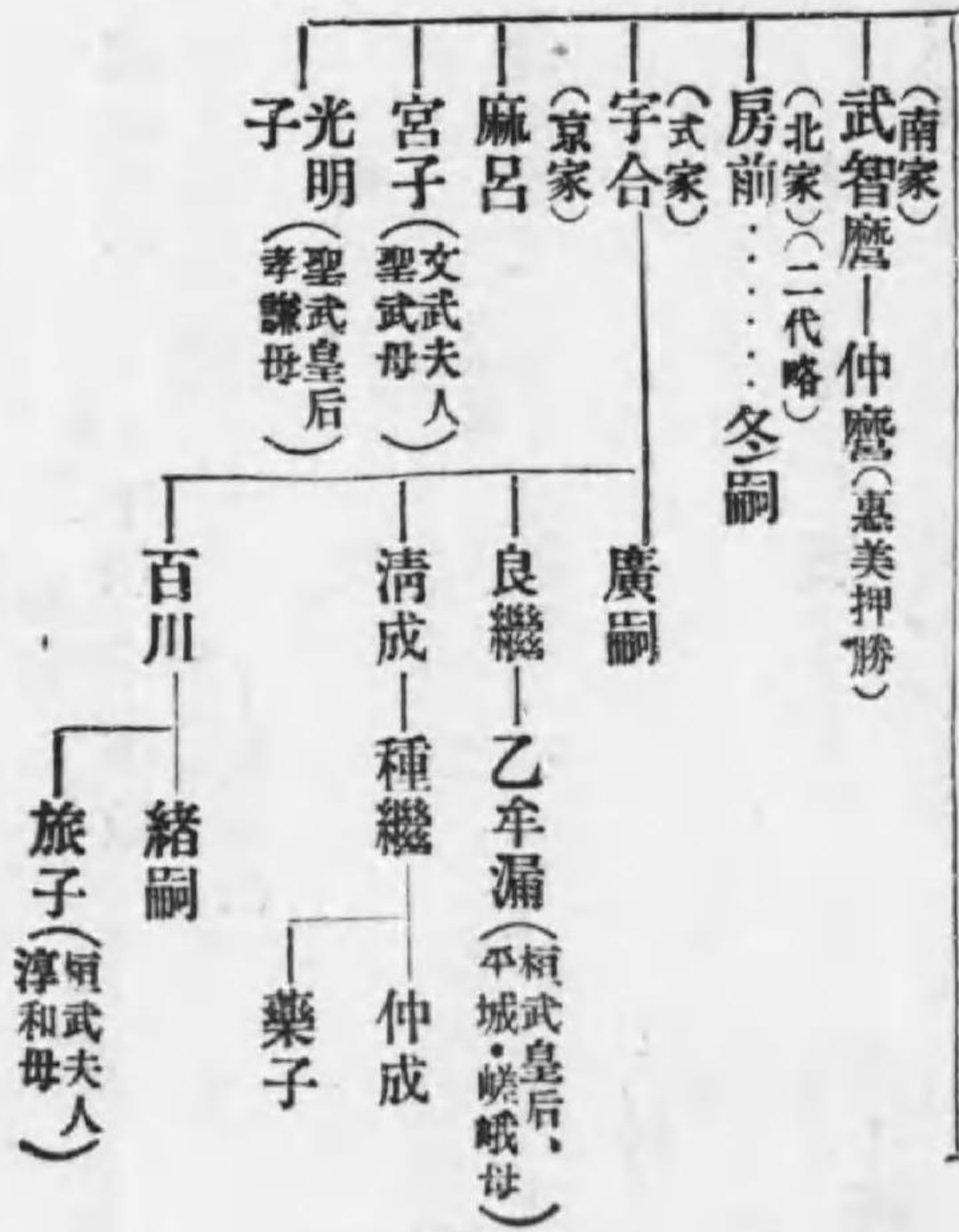
蘇我氏

諸氏系圖



藤原氏

天兒屋根命 (十三代略) 眞人—鎌子 (四代略) (藤原) 鎌足—不比等



和氣氏

垂仁天皇—鐸石別命(十二代略)—乎磨—廣蟲

清麻呂

橘氏

敏達天皇—難波親王(三代略)—橘諸兄—奈良麿—清友—嘉智子(檀林皇后 嵯峨皇后 仁明母)

氏公

入居—永名—逸勢

菅原氏

野見宿禰(九代略)—宇庭—古人—清公—是善—道真

高規—淳茂—女子(齊世親王妃)—欣子(宇多女御)

大江氏

平城天皇—阿保親王—本主—音人(五代略)—成衡—匡房—維順—維光—業平(在原氏)

廣元—親廣—時廣—季光(毛利氏祖)

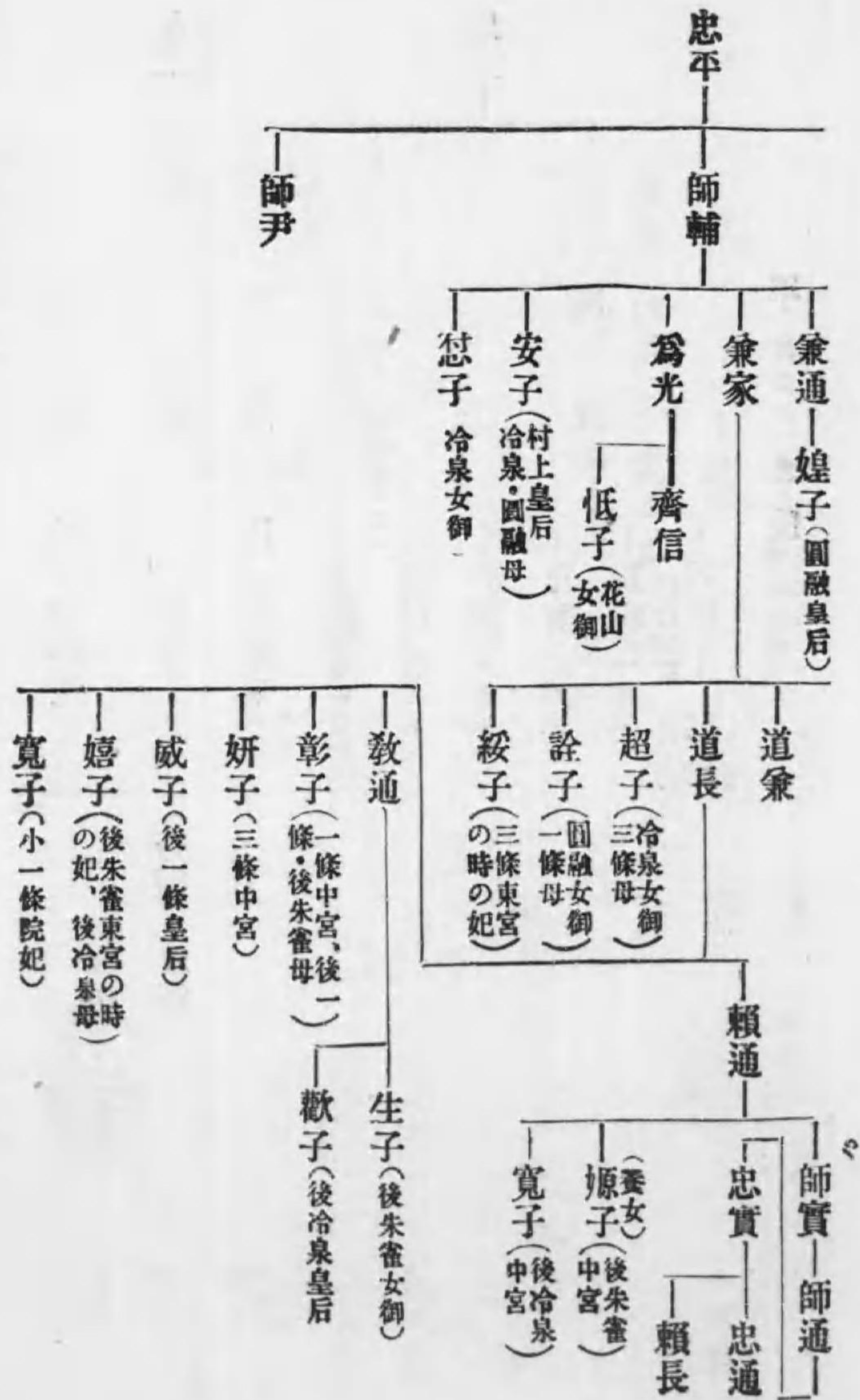
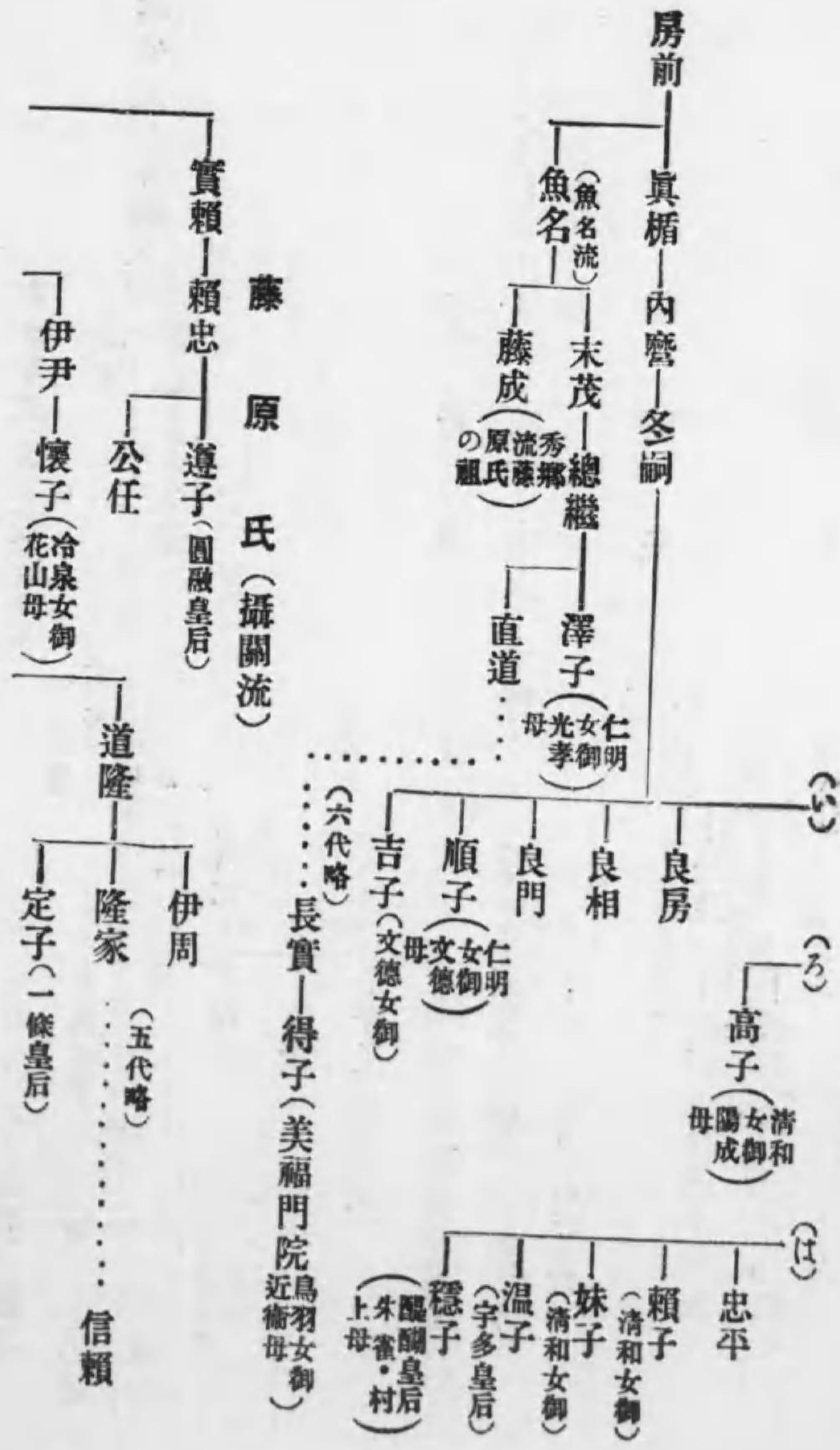
小野氏

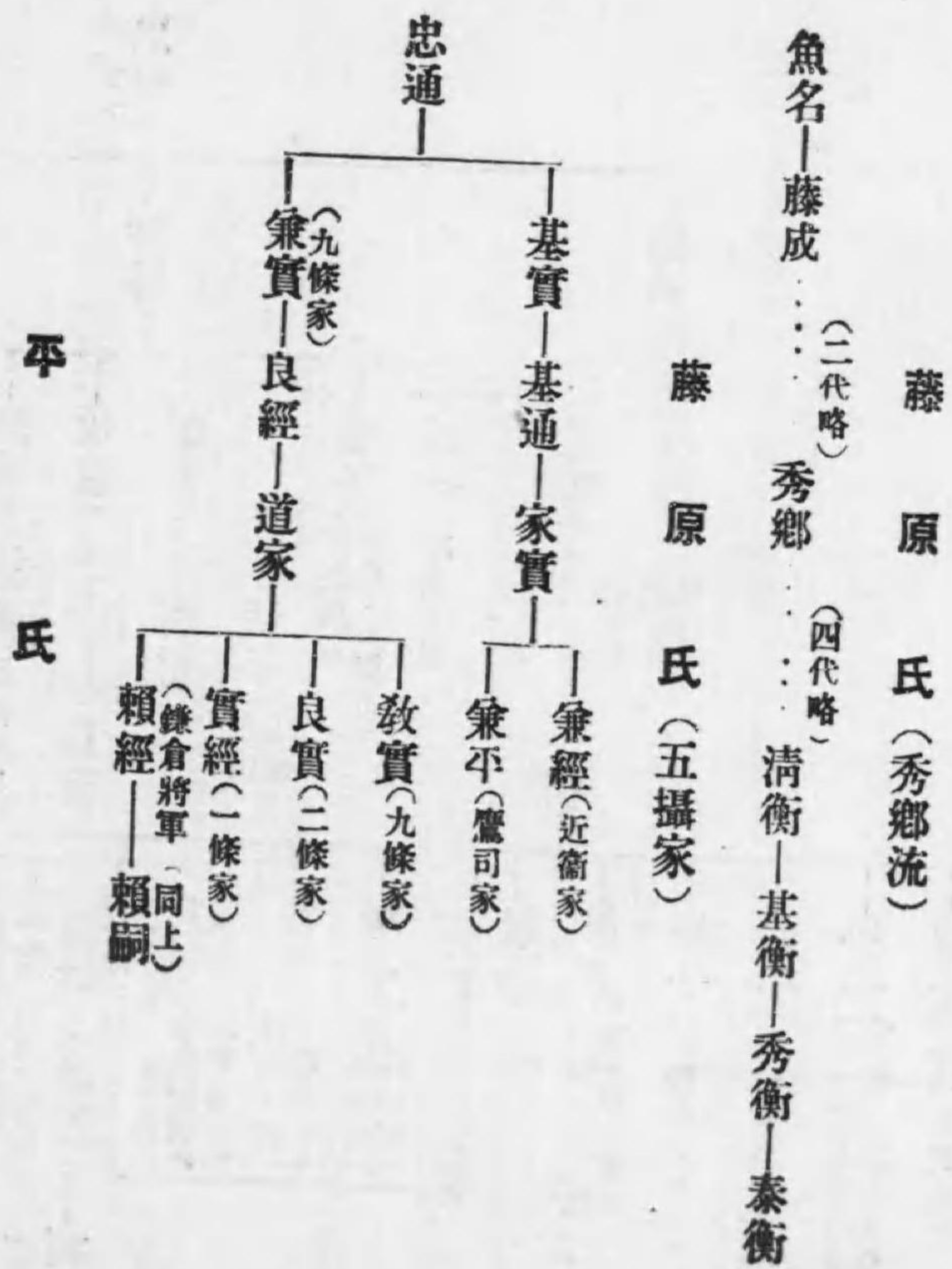
敏達天皇—春日皇子—妹子—毛人—毛野(二代略)—篁—葛絃—道風

良真—女子(小野小町)

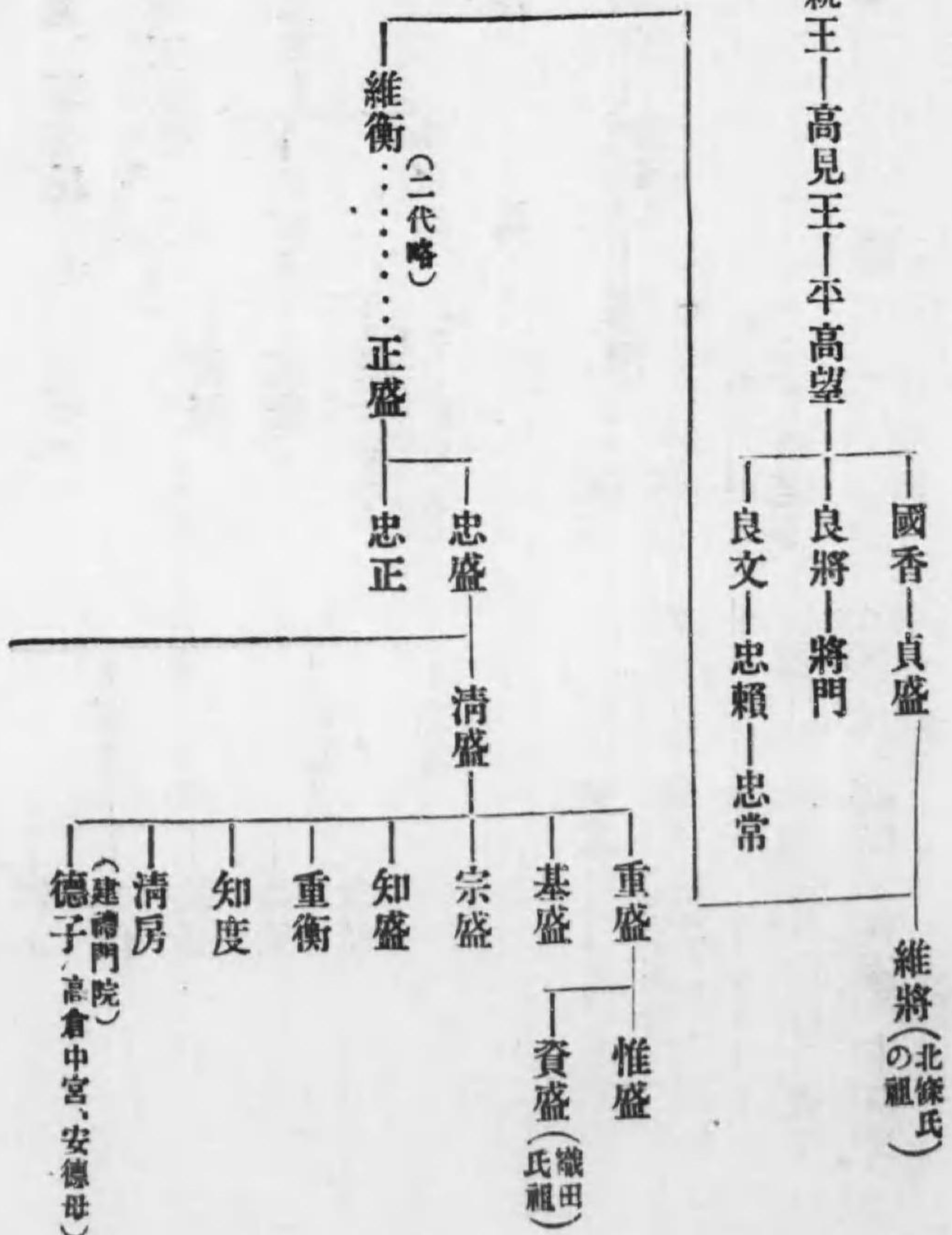
藤原氏

長良—遠經—良範—純友—基經(良房の養子)—時平





桓武天皇—葛原親王—高見王—平高望



清原氏

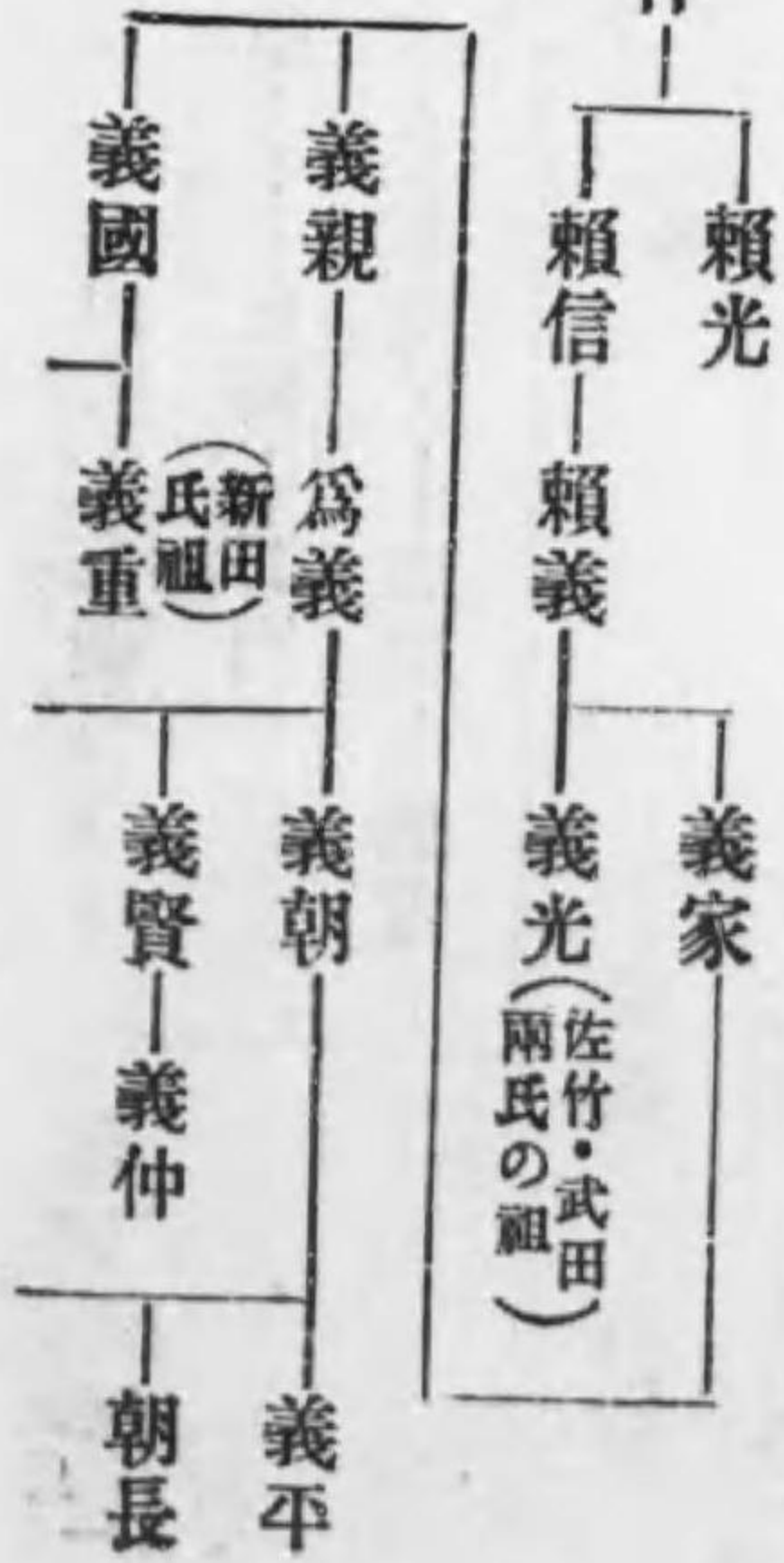
天武天皇—舍人親王 (十代略)

清原武則



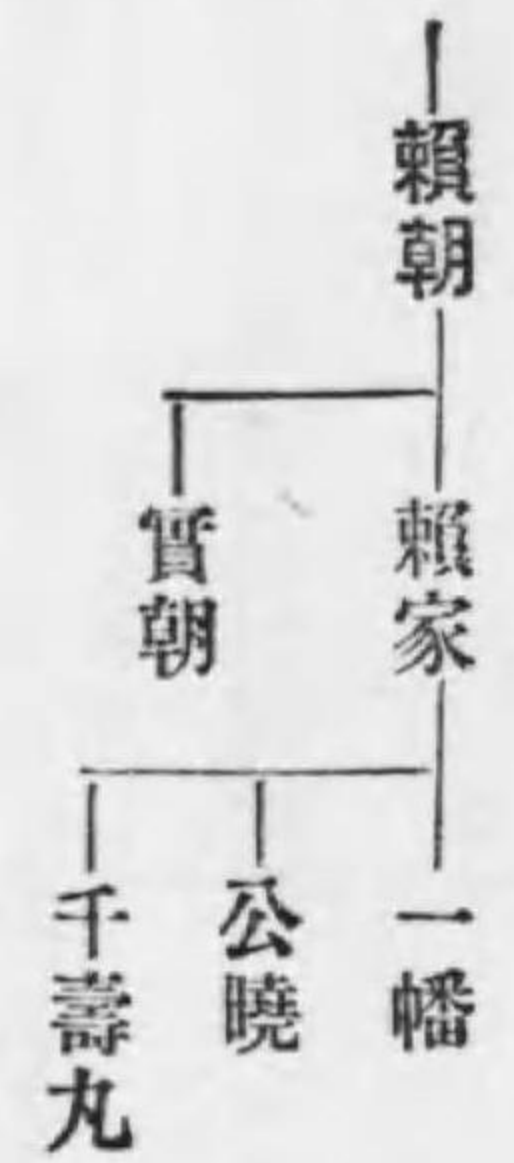
源氏

清和天皇—貞純親王—源經基—滿仲

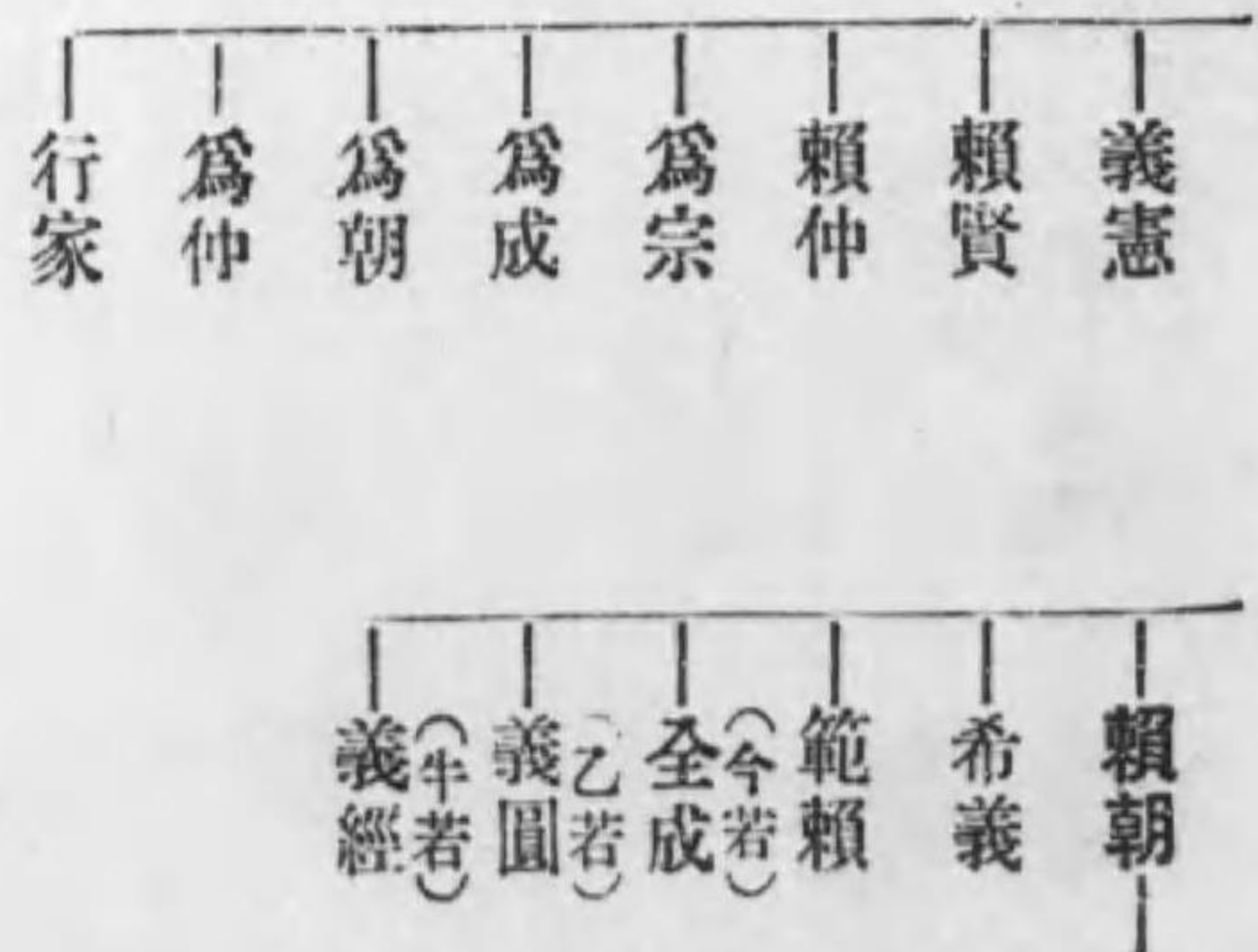


楠木氏

楠諸兄 (七代略) 爲政 (楠木) (四代略) 正遠



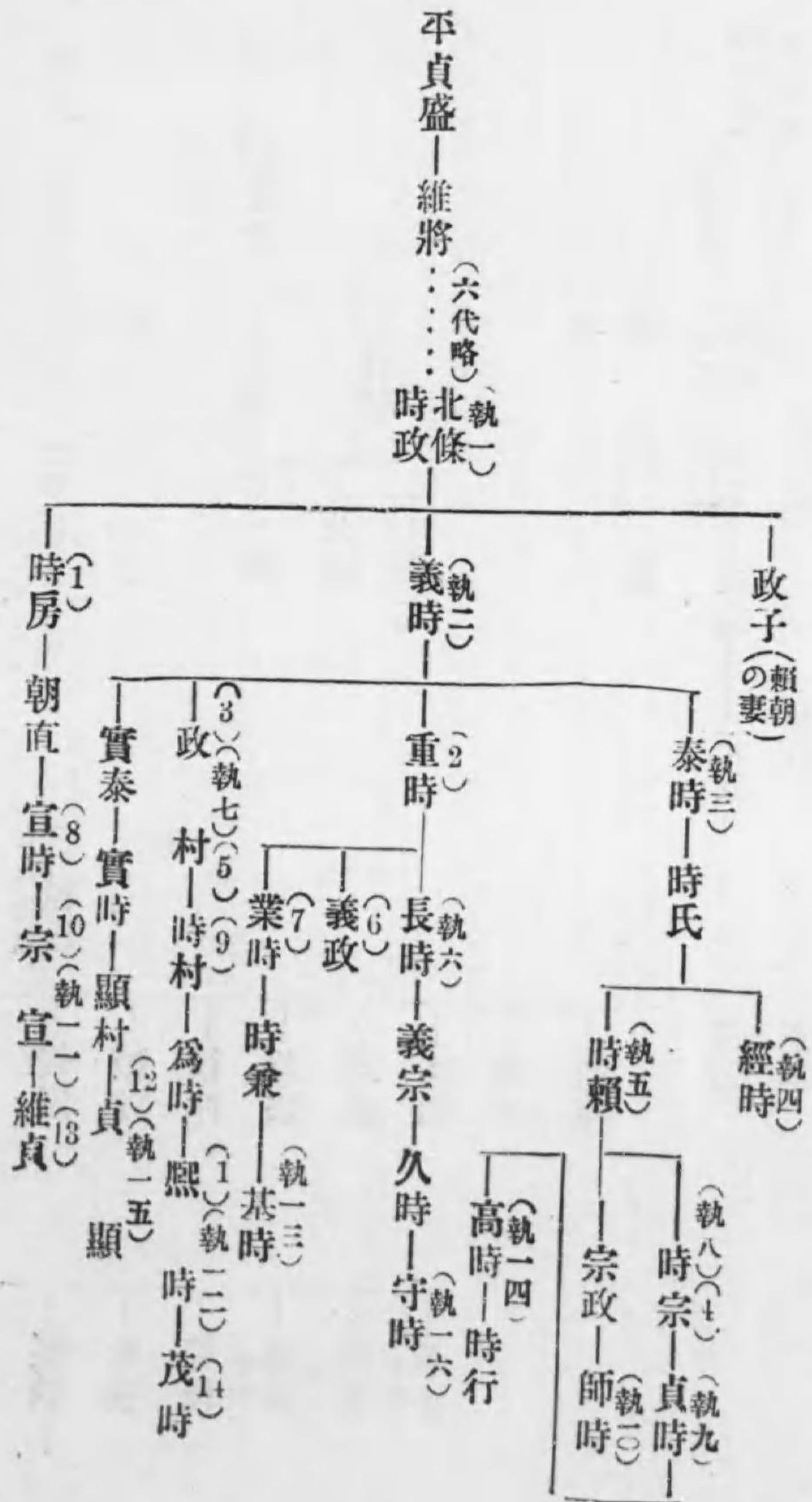
足利氏祖 義康



諸氏系圖



北條氏



【備考】括弧内の執は執權、數字はその代數。アラビヤ數字は連署の代數。

菊池氏

藤原隆家 (三代略) 菊池則隆 (八代略)

武房—時隆—武時—武重

北畠氏

村上天皇—具平親王 (七代略) 北畠雅家 (二代略) 親房

顯家

武光—武政—武朝

新田氏

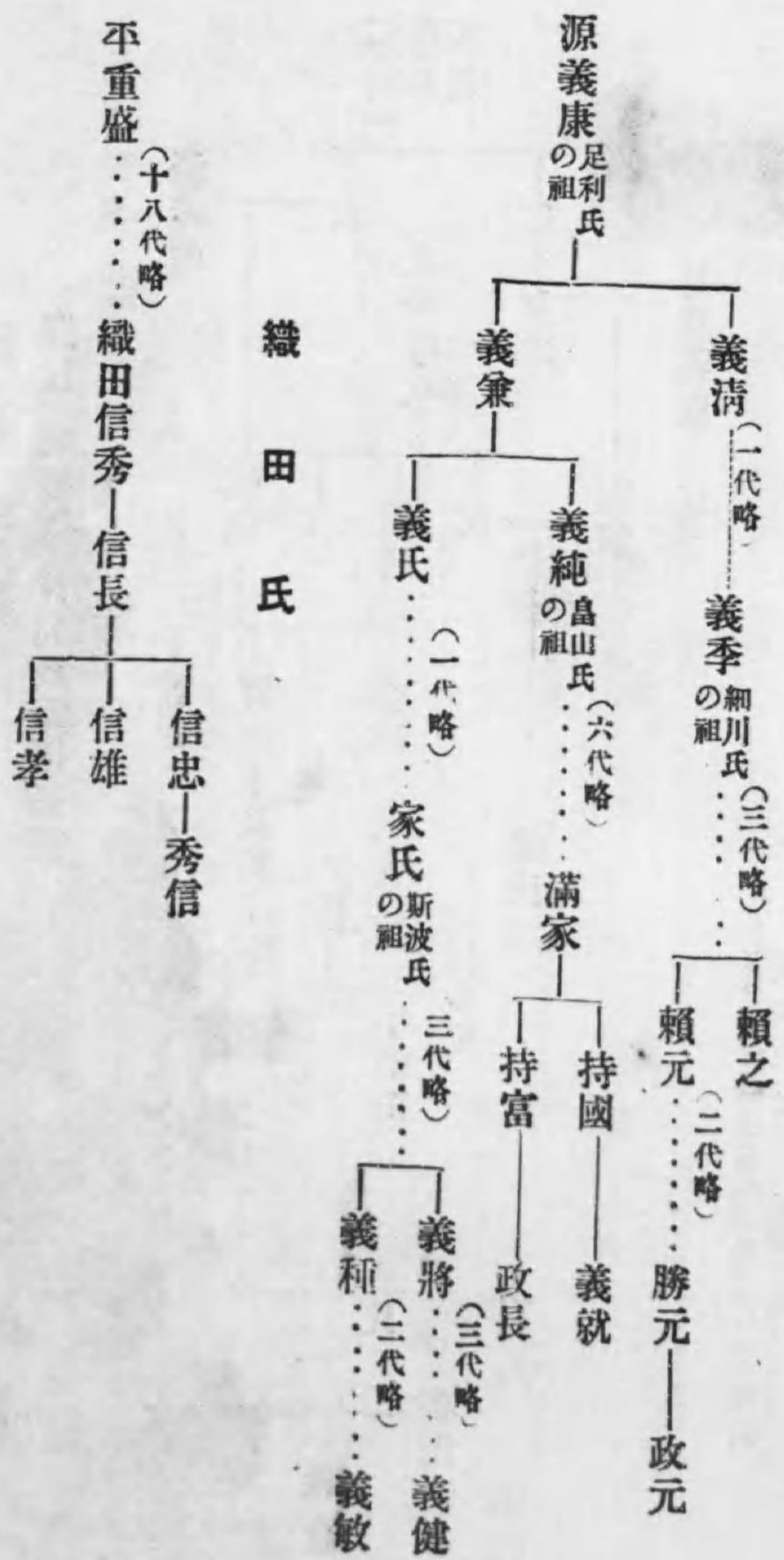
源義國—新田義重

義範 (山名氏) 義俊 (里見氏) 義兼 (四代略) 義季 (徳川氏)

朝氏

義貞 義助 (脇屋氏)—義治 義興 義顯 義宗

三管領家系圖

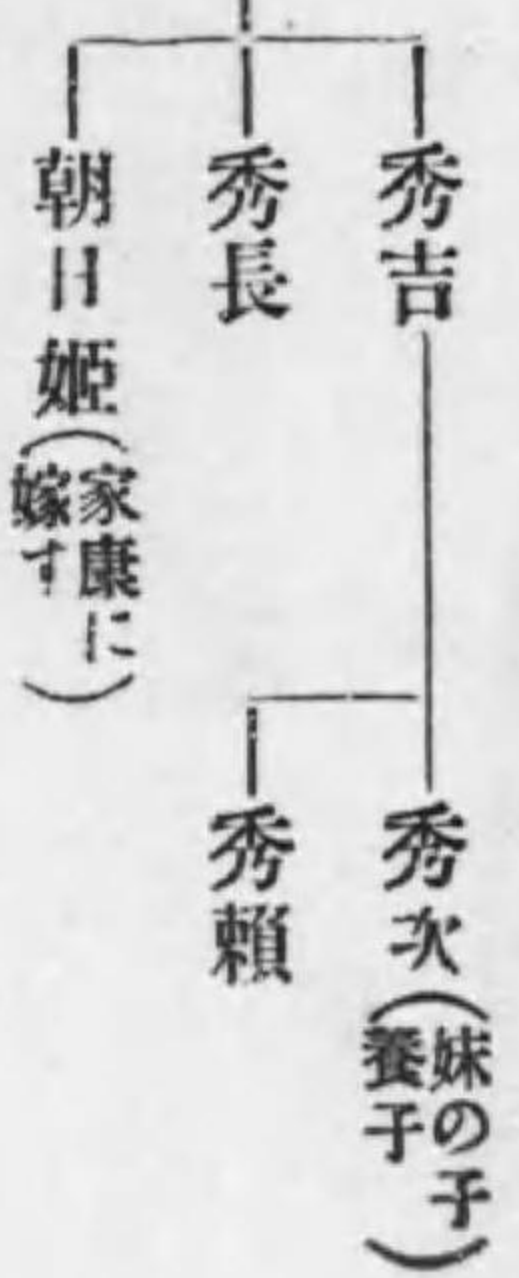


後北條氏

長氏 — 氏綱 — 氏康 — 氏政 — 氏直

豊臣氏

木下彌右衛門



徳川氏(徳川氏はその出自を詳かにせず) (今姑く世に傳ふる所に従ふ)

源義家 — 義國 — 新田義重 — 徳川義季(十五代略) — 松平廣忠 — 徳川家康

自學自習 中等參考 趣味の日本歴史上卷 終り

諸氏系圖

自學自習
中等參考
趣味の日本歴史
定價金圓九拾錢

大正十四年三月二十日印
大正十四年三月二十三日發

刷行



著者 橋本辰彦

東京市四谷區新宿町一の八四

發行者 北村常三

東京市小石川區戸崎町七二

印刷者 荒井東之助

發行所

東京市四谷區新宿町一の八四
振替口座東京二七一三〇番

三友社

荒井活版印刷所印

== 著名の越優界育教 ==

文部省實業補習教育主事 松本喜一 著

最新 實業補習學校の經營

都市教育の權威

著者が實業補習教育の實際經營について、廣く海外の
情況をも視察し、ことに實地問題の部面に向つて大に
研究をされた、ことに本書前篇に於ては、汎く補習教
育全般に及び、後篇に於て今迄比較的研究物の發表の
ない都市實業補習教育について、著者獨特の新研究を
發表されて居る、農商工業何れの補習教育經營上にも
資することが蓋し多大であると信ずる。

四六版上製
紙數二百頁
定價圓五十錢
送料 内地 十錢
滿鮮 十錢

所賣發・所行發

東京四谷區新宿 三友社 振替口座 東京
番〇三一七二

== 著名の越優界育教 ==

文部省實業補習教育主事 千葉敬止 著

實業補習教育制度の研究

實際家の必備書

實業補習教育を發達させることは、我が國現時の情勢
から見て最も急の問題であるといふことで、補習教育
に關する研究が近時頗る進んで來た、隨而斯の教育に
關する制度も段々と整つて來る事になつた。補習教育
に當られて居る實際家に、今日の制度をよく理解し活
用して貰ふといふことは、此の教育の徹底上極めて重
要の事項である。著者がこの方面について永年實地研
究された點を公にされた必讀である。

四六版上製
紙數四百八十頁
定價圓八十錢
送料 内地 十錢
滿鮮 十錢

所賣發・所行發

東京四谷區新宿 三友社 振替口座 東京
番〇三一七二

角田政治、橋本辰彦先生共著

自學自習
中等參考
趣味の日本地理

四六判洋裝
全一冊
紙數四百六十頁
定價壹圓九拾錢
送料金拾貳錢

好評八版

中等教育者諸賢の好參考書

◆ 本書の三大特色 ◆

科學的——地理學は一の科學である。されば本書は首尾一貫完全なる科學的敘述を以てし、殊に卷頭には十數頁を費して地理學研究法を述べた。地理の學習上本書は讀者諸君に對する一大燈明臺であることを確信する。

趣味的——されば其の地理學研究は科學的であると同時に趣味的であらねばならぬ、何となれば眞の世界相は科學的、合法的であると同時に趣味的であるからである。然るに從來の地理學的(超合則的・宗教的・藝術的)であるから、されば本書を續く人にしては、趣味はこの點を全く考慮してならぬ。されば本書を續く人にしては、趣味津津たる趣味のうちには、不知不識眞の世界相を了解し得るのである。

自學自習的——近頃自學自習の聲がやかましくなつたが、それに適する參考書はまた一つもない。敘述の形式・内容兩方面に於て只管自學自習的ならんことを顧慮し無數の練習問題・考察問題を各篇各章各項毎に挿入したる本書は、確に地理諸參考書中の最上席を與へられてなる。

目次一班——第一篇 緒説(地理學研究法) 第二篇 地方誌(自第一章 關東地方至第十一章 朝鮮地方) 第三篇 總括(自然地理總括及人文地理總括) 第四篇 關東州・南洋諸島 附録 大正大震大火災誌地名索引

發兌元 東京市四谷區新宿一ノ八番 三友社

532
102

終